GS　Ｆａｔｅっぽい何か

神代ふみあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＧＳ　Ｆａｔｅっぽい何か

【Ｎコード】
Ｎ８９３５Ｘ

【作者名】
神代ふみあき

【あらすじ】
ＹｏｋｏｓｈｉｍａのテンプレＦａｔｅ移動ものです。この作品の三分の二はご都合主義で出来ていて、あとはどこかで見たような設定で出来ています。その辺にアレルギーがある人は摂取しないで下さいｗ

第零話　設定（前書き）

神代ふみあきの誕生日記念！ｗ

じつは神代、本日がお誕生日なのです！

そんなわけで、私からのプレゼント、になればいいなーというスットク放出です。

ＹｏｋｏｓｈｉｍａのテンプレＦａｔｅ移動ものです。この作品の三分の二はご都合主義で出来ていて、あとはどこかで見たような設定で出来ています。その辺にアレルギーがある人は摂取しないで下さいｗ

とりあえず、設定をはじめっからかきました。

私の稚作でも珍しい話でｗ

第零話　設定

私版　ＧＳでＦａｔｅがちょっとだけ暴走

設定

横島忠夫１９才時、神族過激派により飽和攻撃を受ける。

その際、一緒にいた美神とおキヌは事務所に転移させることができたが、自分は転移の時に重ねてかけられた術により転移失敗。飽和攻撃の中に消えた。

怒りの余りに切れた小竜姫を押さえた猿神であったが、猿神自身の怒りはすさまじく、神魔合同捜査隊を組織した上、反抗者及び累計すべてを殴殺した。

中には魂の牢獄にとらわれているはずの高位の者もいたが、楔ごと消滅させた。

加え、今回の事件の本質である神族が横島を毛嫌いした理由がなぜ漏れたのかを調査したところ、トップダウンによる漏洩と判明。

つまり、横島を生け贄にした組織浄化が行われた、というわけだった。

もちろん最高責任者たちによるモノではなかったが、それに類する者たちの悪辣な行為に多くの神魔や類型が嫌悪を表した。

不平不満怒り嫌悪が渦巻く中、一人の女神が声に出す。

「みつけたのね！」

不眠不休の捜索を続けた女神「ヒャクメ」は見つけた。

横島忠夫がどこに行ったのかを。

衛宮忠夫（横島忠夫）
「忠夫＝衛宮＝フォン＝アインツベルン」

神族の陰謀でＧＳ世界からはじき出される。
光の大樹の森のような場所から、なぜか気になる場所を発見し手を伸ばしたところ、戦争状態のコソボの様な町中に現れた。
現れたのはＦａｔｅＺｅｒｏ終焉間際。
目の前でむちゃくちゃ「やば」そうな呪術汚染物があったので、なにも考えずストックの文珠で浄化したところ意識を失う。
気づいてみれば病院で、何人もの子供と同じ部屋に寝かされていた。
で、なぜか赤毛の男の子と同じベットに寝かされている。
無意識のうちに助けた少年とともに、自称魔法使いのおっさんと超美人の奥さんに引き取られた横島は、冬木の町で大きくなった。

衛宮士郎（＊＊士郎）
士郎＝衛宮＝フォン＝アインツベルン

戦争状態の冬木の町で両親累計を失う。
自分もぼろぼろだったのだが、横島に助けられ、そしてずっと背負われていたことに感謝し、「兄貴」と慕う。
兄が父親とは別の方向の魔法使いであることは幼い頃から知っていて、兄に追いつくタイと努力している。
原作とは違い、ワンツーマンでキリツグから指導されつつアイリのスパルタを受けているため、魔術回路はかなり多くなっている。
ただし、強化と投影しかできないのは同じ。
台所用品は実用レベルで投影できるので、忠夫から「キッチンフ

アイター」とかよばれている。
弓も得意。

キリツグ＝衛宮＝フォン＝アインツベルン
第四次聖杯戦争における勝者。アルトリア＝ペンドラゴンをセイバーとして召還し、勝ち抜いた。
聖杯自体は汚染されていたはずだったが、原因不明の浄化によって根源に至るほどの魔力を得、アインツベルンに栄華をもたらした者としてアイリとイリヤ、そして引き取った子供たちの養育権を得た。
浄化は忠夫の文殊によるものだが原因を知らない。

アイリスフィール＝衛宮＝フォン＝アインツベルン

キリツグのパートナーであり、イリヤの実母。
小聖杯として人格機能を失うはずが、大聖杯の浄化の影響か自我を復帰。聖杯戦争勝利の報酬として、平穏なる人生を約束される。
キリツグが引き取った士郎と忠夫を実子と変わらず可愛がっており、照れる二人をみるのが大好物。

イリヤスフィール＝衛宮＝フォン＝アインツベルン

次期小聖杯用に作られたアイリの実子。
第四次ですでに聖杯を得た為、アインツベルンから以後の人生の自由を獲得。
ふつうの魔術師の子供としての人生を得た。
士郎は出来のいい弟、忠夫は出来の悪い弟として溺愛しており、アイリとともに恥ずかしがらせることに懸命。

士郎は確かに弟扱いだが、忠夫には淡い思いがちらほらしているのだが、それ以上に忠夫が秘匿している力に興味満々のお姉ちゃん。

第零話　設定（後書き）

こんな感じで突っ走ります。

べ、べ、べつに、みんなからお祝いのメールが欲しいからアップしたんじゃないからね！

追記　：　たくさんの方からお祝いの言葉をいただきました。
　かなりうれしかったですｗ

１１／１３　修正しました

第一話（前書き）

エーこの作品で、士郎のことを「シロちゃん」と呼称していますが、これは「わいわい氏：こんなチートでもありですかい？そうですかい。」作品内で使われている呼称があまりにも「びびっと」だったもので、直接お願いしてご許可を頂いたものです。

第一話

「こらぁ～、そろそろお風呂に入らないと、学校に行く時間よ～？」
「うへ～い」
「あ、はーい！」

俺と兄貴はスイシュと呼ばれる拳法の訓練をやめ、汗を拭く。
兄貴とともに体を鍛え初めて何年になるだろう？
親父にかなわないのはいいけど、兄貴にも勝てる気がしないのは悔しい限りだ。

「・・・シロ、俺はひとっ走りして、学校のシャワー使うから、おまえはとっとと家の入れよ？」
「うを、ありがとう兄貴。」

兄貴はこんな風にいろんな所で周りに気を使う。
俺も一成もこう言うところは見習いたいと思っている。
瞬く間に身支度をした兄貴は、本当にスゴい早さで玄関を飛び出した。

「よっし、俺も風呂はいって・・・。」

瞬間、なんだろう、こう、背中にいやな予感が。
これを兄貴は「霊感がささやく」って言うんだけど、俺には「死地にたたずむ」と言う気もする。
・・・まぁ、日々「鈍感」といわれている俺だ、気のせいだろう。

・・・そんな風に誤解していた自分を呪いたい。

陸上部の朝練に来たシロはボロボロだった。
正確に言えば、心がボロボロだった。
おもわず「やはり」としか言いようがない。

「おいおい、ただやん。お宅の弟が随分消耗してるぞ？」
「いやいや、かねやん。単純にスキンシップ疲れだわ」
「ああ、「あの」・・・。」

当校における怪女の一人、氷室女史もうちの母親と姉によるシロへの溺愛っぷりは知っている。つうか、有名で、入学式から始まった各種イベントにおける介入は、一種の奇跡と言われている。
なにしろ、イリヤ姉と母の二人で「ブルマ」チアリーダーとなって運動会の応援をしたり、文化祭にドレスで現れて大騒ぎしたり。

そりゃ有名になるわな。

で、一応普段は自重している二人だけど、「シロニウム」が不足すると飢餓状態になり、超かまって状態になるのだ。
もちろん、俺はかわいげがないので逃げることで回避できているが、日常生活にも「死」が隠れていることに未だ気づいていないシロは、何の学習も生かされず引っかかっていたりする。
まさに合掌。

「まぁ、ほれ、愛されている証拠だわな」
「それでもあの超美人母親と超絶美少女姉にハグハグされれば、精

神も削られると言うものであろう？」
「・・・兄のために犠牲になってくれてありがとう、シロ」
なむなむと祈っていると、シロが俺を見つけたらしい。
「・・・あーにーきーーーーー！！！」
やば、結構怒ってる。
今日のスキンシップは、青少年的にかなりまずかったらしい。
捕まったら、結構な目にあわされそうだ。
「んじゃ、おれはこれで！」
「うむ、ただやん。生きていればまたあおう」
さって逃げるかと言うところでシロ交渉開始。
「氷室〜！　兄貴をとらえてくれぇ！！」
「・・・友情を壊すにはそれなりの報酬が必要だぞ」
「・・・俺謹製ケーキセット三日間！」
「いくぞ、黒豹！！」「ほいきた目鐘！！」
「うっわ、きったねーーーー！」
やべ、バカが増えた！
「うひゃひゃひゃひゃ、忠夫！！　おとなしく我らの経験値となって、レアアイテムをドロップするのだぁ〜！」
「ただやん、きみの友情は生涯わすれん！」
「くっそ、シロめ！　最近こすっからいなぁ！」
ちくしょう、あの純粋で涙を浮かべて「にーちゃ」と呼んでいた

シロはどこに行ったんだ。
ああ、思い出は財布の中の写真の中だけなのか？
「・・・ただやん、ちょっとそれを見せてくれれば逃がすぞ？」「そ、そ、そうだぞ？　こっちにみせてみ？」「あ、あのー、忠夫君。わたしもみたいかなぁ・・・。」「ふぬ、ゆきっち、きさまもか・・・！」

うんうん、シロは人気あるなぁ。
ということで、余りあるシロ写真をばらまいて俺は逃走に成功した。
これぞ、呪術的逃走なり！

「あにきーーーー！」

血の涙を流しながら回収するシロ。
ふふふ、まだまだ修行が足りないのぉ。

「・・・このぉ、変態止まれ！！」
「ふごっ！」

この拳、クンフー、まちがいなく・・・。

「いてぇじゃねーか、凛ちゃん！」
「バカやってないで、はやくこっちの部活に来なさい！！」
「・・・文化系で朝練って、むりねーか？」
「黙ってついてくる！！」

冬木の土地は霊的なポテンシャルが高いそうだ。
で、その土地を管理しているのが魔術協会。
その代行をしているのが「遠坂家」だそうだ。
親父の話では、前回の魔術的な戦争で、遠坂以外の主要な累計は死んだそうだけど、かなりがんばってるらしい。
一度うちに住まないかと誘ったんだけど、鼻で笑われてしまった。
そのくせ兄貴には結構べったりなんだよな、うん。
兄貴が使っている魔術が、あまりに常識と隔絶しているせいで研究に余念がないということだけど、あれはどうみても「ホレ」てるよな、うん。

「そうなの？」
「うん、間違いないと思うよ。」
「ふーん」

って、あれ？

「・・・イリヤ姉？　なんでこんな早くにいるの？」
「んー？　タダオミンが足りないから補充に来たんだけど、なに、あの女。」

やばいやばい、ひた隠しにされてきた事実が表面化したよ、兄貴！！

「で、シロウ？　あの女はなに？」

兄貴、すまん。
俺も自分の命が優先だ。迷わず成仏してくれよ？

衛宮三姉弟といえば、この学校で知らないモノはいない。
長女イリヤスフィール、長男忠夫、次男士郎。
三人が三人ともに各分野で有名だ。

長女は美少女としてだが、加えて成績優秀、素行優秀。礼儀上級と非の打ち所がない。
長男忠夫は試験以外の成績は凡庸だが、試験だけは恐ろしいまでの成績を叩き出す怪人とされている。
で、次男は、なんつうか、子犬的というか、ペット的人気で上級生から絶大な支持を受けている。
この三人は常に騒動の中心だし、視線も集中されている。

が、この三人は「あの」衛宮、なのだ。
前回の聖杯戦争で勝利したあの「衛宮」。
彼が得た「魔力」をどうしたかは知らないが、今現在はご近所の奥さん方に評判なダンディー旦那に成っているのが怪しすぎる。
とりあえず、魔術研究はしていないということなので見逃しているけど、問題は長女と長男！
長女はミドルネームの「アインツベルン」の直系だし、長男は解析不能の「魔法」といってもおかしくないほどの魔術を行使するのだから！！

正直、「スター〇ラチナ」とかいって、私の視界から消えた瞬間、どうやって解剖しようかと真剣に悩んだわよ！
で、本人曰く「すんごい加速」を実現しただけだというのが信用できない。
とはいえ、加速時の実証をするために、小麦粉や蝿捕り紙なんかを仕掛けたところ、一応の納得をしたけど、何でこんなことができ

るのかまでは聞かないことにした。
私だって、「封印指定」はごめんなのよ！
つうか、だれかこのバカを封印してくれないかしら！？

「ん？　どうしたんだ、凛ちゃん」
「何でもないわ、忠夫君」
「ふーん」

今日も今日とて忠夫の「まじゅつ」を研究していたんだけど、妙な気配を感じた。
そう、何となく嫌な気配。

「忠夫、なんか変な気配しない？」
「・・・昨日の夜あたりから、地脈の動きが変やな」

・・・やっぱり。

遠坂は力の流転に関しての専門だが、忠夫は力の流れに詳しい。
地脈や霊脈に関して異常なほどの観察力を持っている。

これだけの能力を持っているのなら、忠夫と組んで聖杯戦争でもすればおもしろいかもしれない。
ほぼ確実といえる勝利が得られるのではないだろうか？

「つうわけで、今晩集合か？」
「ええ。冬木巡視隊の出動よ」

魔術関係における忠夫の防衛能力は、神話時代レベルに到達するものがある。
たまたま現れた「宝石翁」が弟子に所望したというあたりで察し

てほしい。
もちろん、美人がいない環境に行くぐらいなら、こっちに残ると絶叫したのは笑ったけど。
が、翁は永遠の美女がいるぞ、と誘いをかけた。
もちろんいるだろうけど、「死徒」でしょうが。
私のつっこみに、忠夫は首を傾げた後でやはり断った。

「死徒でも何でもええけど、地雷女やろ？」

瞬間、大爆笑の翁は、忠夫の魔術根元の一部と翁の宝石剣の一部を交換した。
弟子と言うよりも、年の離れた友人を得たという事らしい。
まぁ、そんな騒ぎがあってか、魔術師といい人外といい冬木に集まるようになってしまったため、私と忠夫は定期的に夜間巡回しているのだ。

「・・・イリヤ姉には内緒だぜ」

「なにが内緒なのかしら！！」

ばん！　と開かれた扉で立っているのはイリヤスフィールお姉さま。
足下には気絶したシロ。
くそ、下手こいたな、シロ！！

「あら、イリヤスフィールさん、おはようございます。」
「リン、きもちわるいから猫かぶらないちょうだい」

にべもない切り捨てに、イゲタがリンの額に浮かぶ。

「・・・イリヤスフィールさん、ただいま我が部の打ち合わせ中ですの。部外者は退出なさってくださらない？」
「ふん。うちの弟を誑かして深夜デートを繰り返しているって噂、知らないワケじゃないのよ？」
「し、し、し、深夜デート！？　な、な、な、何でそんな噂が・・・・」
「あのね、リン。あなたみたいな目立つ女子が、冬木の繁華街を男と一緒にうろついてたり、喫茶店で一喜一憂してれば噂になるに決まってるじゃない」

真っ青になったあと、真っ赤になって俺をみるリン。

「タダオ、あんた、知ってた？」
「当たり前やろ？」
「な、ん、で、教えないのよ！！」

ネックハンギングブリーカーをその小さな手でするな！　まじでしまるぅ・・・・！

「やめなさい、リン！　私の弟を殺す気！」
「ええい、この不謹慎者なんか三度ぐらい殺した方が世のため人の為よ！！」
「殺すんだったら、魂を人形に移すから待ちなさい！」

なんでイリヤ姉さんは俺やシロちゃんを人形にしたがるかなぁ・・・。
やっぱりあれか？　身長が抜かれたあたりでコンプレックスでも持ったんやろか？

まぁ、なんつうか、兄貴、冥福を祈る。

実際のところ、校内では遠坂と兄貴の仲は半ば公認だ。
上品な高級猫のような遠坂と野良猫大将な兄貴の組み合わせがあるかどうかは不明だけど、わりと好評だったりする。
やっぱ、兄貴自身の人気が高いせいだと思うけど、裏側の話でいうと、遠坂がこの土地のセカンドオーナーであり、俺たちが間借りしているヨソモノだというあたりにも関係しているとおもう。
聞けば遠坂の師匠筋の始祖（というか死徒）にも兄貴は気に入られてるそうだから、兄貴の人外吸引体質にも困ったものだ。

「シロウ！　なんであの雌猫が絡んでたことをお姉ちゃんに教えなかったのぉ！？」
「いや、だって、部活だって・・・」
「シロウ！　タダオの女好きを忘れたの！？」

いやぁ、確かに俺個人としても兄貴が遠坂とくっつくのは勘弁し

てほしいけど、それでも、恋愛は自由だしなぁ・・・。

「・・・シロウ、もしかして、アナタまで雌猫(リン)に・・・」

「い、いや、そんなわけないだろぉ！？」

昼休み、昼食中の屋上でのヒトコマ。

兄貴は朝できなかった打ち合わせを部室でするとかいって教室から遠坂に引っ張られていった。

で、一歩遅れたイリヤ姉ぇが俺を確保となったわけだ。

「もう、タダオは脇が甘いし、シロウはすかすかヘッポコだし、お姉ちゃん困っちゃうわ」

深々とため息をついたイリヤ姉。

なんともそんな姿もかわいいものだから、校内では「永遠の妹」とか言われていたりする。

「イリヤ姉、一応、セカンドオーナー業務の一環ということで、衛宮への調査協力だよ？」

「あのねぇ、シロウ。本気で言ってるの？」

一応、建前。

まぁ、兄貴のことをかなり気に入ってるからなぁ、遠坂。

「・・・というわけで、今晩監視に行くからね？」

「了解」

姉の命令には絶対服従、姉の提案には宣誓専従。

我が家の陰のルールだ。

表のルールは「御母(ママ)様には絶対服従」。

これはイリヤ姉でも逆らえない。

第一話（後書き）

ぬるーいＦａｔｅっぽい何かですが、どんなもんでしょ？

追記：　聖杯の真実を知らないという段階で、凛は根源にいたる魔力を聖杯とともにキリツグが得たと考えています。表向きの聖杯戦争の内容ならそれで正解です。が、真実とは様々なレベルによって違う、という話です。

１１／１３　修正したよー

第二話（前書き）

さぁ、イレギュラーに次ぐイレギュラーなのです！

第二話

凛ちゃんとの夜間巡視は、いわば自己防衛だ。
魔術を極めて「根元」に至ることを目的にしている「魔術師」達は、一般人のことなど気にもしていないけど、その一般人に「魔術」が知られることを嫌う。
これは魔術の拡散を嫌うというよりも、魔術が「科学」にすり替えられてしまうことをおそれているのだと思う。
再現不能な異能「魔法」。
科学再現不能な範囲だが魔術師が再現できる「魔術」。
そして魔術でもできるが一般化してしまった「技術」。
この三段階の真ん中が魔術師の行る場所で、一段階あがるためにシノギを削っている。
まぁ、誰にでも至れるものではないらしいけど。
で、俺から見ると、おめーら魔法で良いじゃねぇか、って無茶をしているくせに、根元なんて無謀なものを求めてるからゴールに届かないわけだったりする。
仕方ねぇんだろうけどな。

で、手っとり早く階段をとばす方法として他人の研究をかっさらうという手法がある。
まぁ、現実に聖杯が存在した霊地だ。
残り滓だけでも美味しいという事で乗り込んでくるバカが絶えない。
大概は「バカ」をイナして終わりなんだけど、「大バカ」や「真バカ」「超バカ」なんて言うのかがくると、ややこしいまでに大騒ぎになる。
故に、俺たちは度々巡回しているのだ。

「忠夫、どう？」
「んー？　寺あたりに力が集約してんな」

つうか、あの地下って「アレ」のある場所やろ？
何で力があつまるんや？　あれは満たされた力と共に勝者によってアインツベルンにもたらされたはずなんやけど・・・・。

「そう、やっぱり始まるのかしら？」
「あれから何年も経っとらんぞ？」
「でも、この空気、この気配、間違いないんじゃないかしら？」

絶対無いとはいわんけど・・・・。

「すでに聖杯は失われておるんやで？」
「・・・それもそうなのよね」

そう、すでにこの地の「大聖杯」もアインツベルンが用意する「小聖杯」もない。
あるのは落ちた地脈といわれるこの土地だけ。
確かに間桐も遠坂もいる。
しかし、アインツベルンは至ったので手を引いた。
さらに言えば「小聖杯」は既に「無い」のだ。

「で、どうする？」
「んー、出てくりゃめっけものってことで、召還してみるわ」
「うわ、まじ？」
「ええ、得られるものが聖杯じゃなくても、勝者という名前がほしいだけだし」

なんつう好戦的なセカンドオーナーなんや。

「もちろん、忠夫も召還なさいね？」
「問答無用かいな」
「忠夫はなにがいい？　私はやっぱり「セイバー」かなー、セイバーよねぇ・・・」
「おいおい」
「忠夫あたりなら、そうね、キャスターとかバーサーカーがいいんじゃない？」
「美人の姉ちゃん以外呼ばん」
「・・・はぁ、そういう英霊って、結構少ないと思うわよ？」
「いないわけやない」
「せめて、私と共闘できる英霊にしてね？」
「つうか、参加決定かよ、わし」

あたりまえーとか笑ってる凛ちゃんをみて、殺意を覚えたのは自然やろうなぁ。

「聞いた？　シロウ」
「聞いた」

タダオとリンが何をしているかを探りに来て、驚きの話を聞いてしまった。
あの聖杯戦争が再び起きるかもしれないと言うのだから。
加えて、リンってばセイバーを呼びたいだなんて分不相応な願い

なんか言ってるし。
まったく、触媒も用意していないのに計算だけで呼ぼうって腹ね？
ここは一つ、妨害でもしないと気が済まないわ。

「というわけで、シロウ。あなたも参加するのよ」
「え・・・まじで？」
「マジ」
「・・・でもさ、触媒なんか持ってないぜ？」
「大丈夫。土蔵の魔法陣が代わりになるから」
「兄貴に怒られるって」
「タダオと私。どっちが怖い？」
「・・・わかりました、お姉さま」

うんうん、シロウは素直で良いわねぇ～。
これで更に素直に「人形」になってくれれば言うこと無いのに。
何で嫌がるのかしら？

まぁ、いいわ。

「シロウ、あなたはセインバーを引き当てなさい」
「イリヤ姉は？」
「タダオの補助よ。あの子、絶対触媒なしで怪しげなサーバントを呼び出すに決まってるんだから。せめて、本家からせしめた触媒を使ってあげないと」
「うわぁ、なんか贔屓を感じるなぁ・・・」
「シロウ、信教っていうのは、信じていない奴らにこそ手厚いものなのよ？」

ふふふ、タダオ。
あなたも絶対「お姉ちゃん最高、愛してる教」に引き入れてあげ

るんだから。

「・・・おれ、そんな邪教に入ってないんだけど？」

「ふふふ、シロウは既に枢機卿クラスじゃない？」

怪しげな現状況を聖杯戦争として相談したら、おやじも召還に立ち会ってくれるということになった。

アイリ母さんとイリヤ姉はシロちゃんにつきあうとか。

「って、シロちゃんも参加っすか？」

「ああ、士郎も参加するって聞かなくてね、というかイリヤに尻をたたかれつつといったところだな」

「うっわぁ・・・・」

どうやら凛ちゃんとの行動は見透かされていたみたいだ。

「で、どのクラスを召還するんだい？」

「あー、考えちゃおらんですけど、ランサーかアサシンか・・・」

「キャスターではないのかい？」

「んー、まぁ、触媒なしっすから」

そんな苦笑いと共に召還したとたん驚いた。
現れた人影は二人。
両肩に令呪は二セット。

「・・・サーバント、ランサー」
非常に無口で赤毛の褐色美人と、
「サーバント、アサシンなのです！」
元気いっぱいの少女。
唖然とする俺とオヤジだったけど、褐色美人が俺のアゾットについている子犬のストラップを手に取った。
「・・・これ、ちょうだい」
「・・・あ、ああ、ええで」
するりと抜いて渡すと、満面の笑みとなった褐色美人は片膝をついた。
「サーバント、ランサー。望みは得た。主に従う」
「ランサー殿が従うなら、私も従ってやるのです！」
なんでも、アサシンはランサーの活躍した時代の部下だったそうだ。

「しかし、一度の召還で二体の英霊を召還するとは、忠夫も規格外だね」
「あー、それはですねぇ・・・」

気まずそうなアサシン曰く、ランサーが召還されたのを感じて、むりやり割り込んだそうな。
アサシンの願いは「『この』ランサーと常に共にあること」だったからだろうか？
世界から英霊として必要とされるとき、必ずセットで呼び出されるという。

危ない危ない。

バックアップで文珠を準備しておいてよかった。
二人分も現界させたから、結構ストック減っちまった。

それは美しい少女だった。
金色の髪の毛が、白磁の肌が、月明かりに現れた陰ですら美しかった。

「サーバント、セイバー。召還により・・・」

言葉すら煌めいて聞こえるのは気のせいじゃないだろう。

「問おう、あなたがマスターか？」
「うん」

うなずくと、彼女は片膝をついた。
「サーバント　セイバー。この剣にかけ、あなたと共にあることを誓います」
まるで結婚の言葉のようだ、と思わずつぶやくと、彼女も真っ赤になった。
「もう、セイバー。うちの弟をたぶらかさないでよね」
「・・・イリヤスフィール！？」
「うふふ、変わらず凛々しいわね、セイバー」
「アイリスフィール！？」
どうやらこのセイバー、姉さん達の知り合いらしい。
「・・・今回は私たちは参加してないの」
「では、この少年が・・・」
「そ、私の義理の息子、士郎。このこがあなたのマスターよ」
にっこりほほえむアイリ母さんに一礼したセイバーは、俺に向かって視線を合わせた。
「なぜ聖杯戦争が続いているかわかりませんが、この身はあなたのサーバント。共に戦いにきましょう」
「あ、ああ！　セイバー、よろしくな！」
鎧を脱いだセイバーと握手した俺は、サーバントも体温を感じられることにパニックになってしまった。

第二話（後書き）

一気に三体のサーヴァントの出現です。

出演サーヴァント

セイバー　：　真名　アルトリア＝ペンドラゴン

ランサー　：　真名　不明　槍では天下無双だったらしいｗ

アサシン　：　真名　不明　ランサーの生前からの知り合いらしいｗ

１１／１３　修正したよー

第三話（前書き）

・・・・

第三話

驚いたことに、セイバーは士郎が召還していた。
忠夫からの電話で聞いて気絶するかと思った。
で、私が召還できたのはアーチャー。
なんというか、超不満。
加えて忠夫のやつ、二体も召還しやがった。
超超不満！！
更に更に加えて、士郎が召還したのは前回勝利を収めた最強のセイバー。

ぐあぁーーーーー！　くそーーーー！　あたしのセイバー返せぇぇぇ！！

「マスター、私がそんなにも不満か？」

不満も不満、大いに不満。
なにしろ、あらゆるパターンに備えてセイバーが来るように魔法陣を準備したのに、出てきたのはアーチャー。
加えて過去の自分を覚えていないなんて言うヘッポコぶり！！
そんなヘッポコに不満を感じないわけ無いでしょうがぁ！

「それは、マスターのうっかりにも原因があるだろう？」

ああ、はいはい、そりゃそうね。
まぁ、一応は認めてあげてもいいわ。
でもね、あんたのヘッポコの原因にはほど遠いわよ！！

「まぁまぁ、凛ちゃん。うちのランサーを餌付けして癒されてくれ」

・・・くっ、たしかに癒されるわ。
成人女性の体で小動物のような食べ方、動き、オーラ。
くぅ、かわいい・・・・。

「忠夫、ランサーとうちのヘッポコ交換しなさい」
「凛ちゃん、ランサーにはアサシンがついてくるで。二体も英霊支えられるんか？」
「・・・ぐぅ！」

あー、くそ、この鬱積はランサーの餌付けで晴らす、決定ね。

「ランサー殿ぉ、私のも食べてくだされぇ」

何気に「この」アサシンも可愛い。
かなり悔しい。
うー、二体支えられれば、いいかも。

「くっ、やりますね、ランサー。この私が糧食を分けたくなるなど、並ではありません。・・・強敵です」

あー、可愛いし麗しいし美しいんだけど、このセイバー、なんかズレてるわよね。
まぁ、三体共に「衛宮」らしいといえばいえるんだけど。

「ま、士郎まで召還してるとは思わなかったけど、七体中四体押さえられたのは暁光ね」
「セイバー・アーチャー・ランサー・アサシン、あとはキャスター・ライダー・バーサーカーかぁ。誰が召還するのやら」

凛ちゃんの言葉にイリヤ姉がため息でかぶせた。
「で、忠夫。ランサーとアサシンの真名は聞いた？」
私の問いに、顔をゆがめる忠夫。
「あー、そのな、聞いたら驚く、つうか・・・信じてもらえんやろうなぁ」
一応耳元でささやいたが、真っ白に燃え尽きていた。
「・・・まじ？」
「まじ。霊視もした」
「うわぁ・・・・・」
思わず凛ちゃんはランサーとアサシンをみたが、ランサーは可愛く小首を傾げるだけだった。
「で、セイバーは・・・・」
「・・・まじ？」
「まじまじ」
ばったり倒れ込んだわたし。
「あたしも、衛宮姓を名乗ろうかしら？」
「凛ちゃんのうっかりは、のろい級やからなぁ」
・・・自覚あることを指摘されると、効くわね。

「この」世界は興味深い。

何しろ、爺さんやアイリスフィールが生きていて、さらには衛宮士郎以外にもう一人養子をとっていたのだから。

加えて、既にこの地に聖杯はなく、それなのに聖杯戦争が起きようとしていたので、セカンドオーナーとして介入するために、召還を行ったというのだ。

で、衛宮にも協力を得て、「衛宮士郎」と「衛宮忠夫」によって召還が行われた。

世界自体がイレギュラーな事が原因なのか、召還も恐ろしくイレギュラーで「衛宮忠夫」が二体のサーバントを召還してしまった。

それも、二人とも古代中国の英雄達だ。

イングランドの英雄であるセイバーにも劣らぬ信仰があり、ことアジア圏でいえば神にも等しい力を信じられている存在でもある。

少なくとも、私の知る聖杯戦争ではなかった事態だろう。

「なーなー、アーチャー」

霊体化している私を的確に呼び止める「衛宮忠夫」は、自称霊能者。

「なんだ、忠夫」

この少年は、見た目ほど甘い存在ではない。
遠坂凛の指示に、謂々諾々と従っているように見せて、かなり巧妙に状況を操っている。
少なくとも、現在までの状況を鑑みるに、かなりの知恵者だ。

「アーチャーは飯くわんのか？」
「本来、サーバントに食事は必要ない」
「本来つう事は、裏道もあるんやろ？」
「言い換えよう、魔力をパスを通して供給されている限り、食事などという些末な行為は必要ない」
「つまり、食事をすれば、魔力の消費を押さえられる、そういうこっちゃな？」
「・・・・」

そう、こう言うところだ。
明らかに常識からかけ離れた発想で、あり得ない事実を引っ張り出すのだ。

「つうわけで、凛ちゃんの魔力消費を抑えるために、食事に参加せい」

これが衛宮士郎ならば、「食事ぐらい一緒にしよう」だのなんだのと感情で語る。
が、この忠夫、ひっくり返し難い点を、徐々に攻めてくる。
これが敵でないことを安心せねばならない。

「兄貴〜、そろそろ準備できるぞ〜」

「お～、いまいくわ～」

にっこり笑った忠夫は、問答無用で霊体化した私を、グイグイ引っ張っていった。

・・・私の常識よ、どこに・・・。

どこの田舎大家族なのかという勢いで集まった聖杯戦争同盟。
先代の勝者である衛宮夫妻。
その子供であるイリヤスフィール。
で、その養い子である忠夫と士郎。
加え、サーバントである「ランサー」「アサシン」「セイバー」。
で、私とアーチャー。
なんだか、本気で聖杯戦争しているのかどうか疑問に感じないわけではない。

「ガツガツガツガツ」
「ハムハムハムハム」
「もふもふもふもふ」

忠夫、ランサー、セイバーが、猛烈な勢いで、まさにカキ込む勢いで食事中。

「うんうん、兄貴たちの喰いっぷりは見事だなぁ」
「というか、セイバー並の食いしんぼ、始めてみたわ」
「もふもふ・・・、くわぁ！　なんという謂われのない侮辱！　私

は食いしんぼではありません！！」

ほっぺたにご飯粒をつけていてそれは通らないわよ、セイバー。

この点でみると、うちに召還されなくて助かったかもしれないわね。

主に、食費的な意味で。

「うふふ、ランサーちゃん、これは食べる？」

「・・・ザシュ！　はむはむはむ」

「ほわぁぁぁぁ、かわいいわぁ」

ランサーの可愛いたべっぷりに癒されるアイリスフィールさん。

「ランサー殿、こ、これも！」

「・・・ザシュ！　はむはむはむ」

「ほわぁぁぁぁ、ランサー殿ぉ」

なるほど、歴史上はどうだったか知らないけど、こういう関係だったのね。

「む？」

「ん？」

「あっ」

「！」

サーバントたちが同時に視線をあげた。　それぞれの方向をみているが、感じたことは一つだろう。

「なにかが呼ばれた、です」

「何にせよ、敵が生まれた、ということだ」「・・・今回の聖杯戦

争の真実がどこにあるのか、それを明かさねばなりません」
「ハムハムハムハム」
とりあえず、ランサーは思索よりも食事が先らしい。

霊体化できないセイバーは近隣の林で待機。
その他は学校に登校した。

「・・・こりゃ、なんだ？」
「むぅ」
「・・・なんてゲスな構成・・・！」

校門をくぐった途端、俺たちはめまいを感じた。
無理矢理力を吸い出されるような、そんな妙な術を感じる。
それも、一定量を無理矢理引き出すものだから、力の弱い人間なんか衰弱死寸前までいくだろう。

「忠夫、私はこれから術の構成を調べて基点を探すわ」
「ほんじゃ俺とシロちゃんは流れを探して術者探しやな」
「わかった、じゃぁセイバーも呼ぼう！」
「お、せやな。ランサーも実体化してくれ。逆にアサシンは隠れつつ俺たちを追ってくれ」
「・・・わかった」
「わかったのです！」

俺とシロちゃんは、術の流れを追って走り出した。

「アーチャー、フォローよろしく！」

「心得た」

背後の会話を流しつつ、流れを追うと、どうやら校舎内に力が集まっているようだ。

「兄貴、護符、よろしく」

「おう、シロちゃんもとびかかんなよ」

「おう」

お互い短気な所が多いので、お互いでフォローしあうという形が多い俺たちだったが、利からの流れの集中を感じて階段壁に身を寄せる。

「（兄貴、この階だな）」

「（ああ、制御もしてるみたいだから、この術者を倒せば、どうにかなりそうやな）」

指サインで意志を交換し、突入のタイミングを合わせる。

シロちゃん突入、俺反撃。

ガードは護符、ということにしている文珠に一任だ。

「「3・・・2・・・1・・・」」

ぜろ、と言葉にしないで動き出したところで、呪力が集中している先にいる女子が男子に蹴られているのがわかった。

このぉ・・・・

「愚か者がぁ！！」

まさに兄貴が飛んだ。
いや、ランサーが兄貴を意志を受けて、兄貴を投げ飛ばした。
兄貴はそのままドロップキックの姿勢で、女子をけたぐっている男子を蹴りとばした。
投げ飛ばされた運動エネルギーを、すべて相手に叩き込んだ兄貴は、ひらりと舞うように女子の前に降り立った。

「大丈夫でしたか、お嬢さ・・・ん」

紫色の髪の毛をした女子を助け起こそうとした兄貴は、あり得ないものをみたかのような表情で固まった。

「忠夫！　基点は破壊したわ！！」

窓から飛び込んで着た遠坂の声も耳に入っていない兄貴は、その女子の肩をつかむ。

「・・・お、おまえ、なぜ、ここに？」
「・・・・」

女子は、ゆっくりと立ち上がり、兄貴の正面にたった。

「・・・ヨコシマ、ひさしぶり、かしらね？」

「・・・ああ」

なにか、本当に何かを語りあいたそうな雰囲気は、一瞬にして霧散した。

「なにしてるんだよ、ライダー！　はやくこいつらをたおせ、殺せ！！」

瞬間、紫色の髪の女子は、ひらりと身をかわして男子の隣にたった。

いや、あの男子・・・

「シンジ、なのか・・・！」

「なんであんたがサーバントを従えてるの！？　あんたは魔術師じゃないでしょ！」

「うるさいうるさいうるさい！　ちょうどいい、おまえ等全員倒して、僕が真の勝者になるんだ！！　ライダー、こいつらを倒せ！！」

命じられた女子、ライダーは、無表情にシンジをみた。

「アーチャー、ランサー、セイバーまで同時に相手をすれば、速攻であたしもあんたも死ぬよ。それでも戦えってかい？」

耐えきれない憤怒を抱えた顔のシンジは、再び叫ぶ。

「・・・くそ、役立たずが！　ライダー逃げるぞ！！」

「わかったよ」

ライダーはシンジを抱えた瞬間、一瞬光って消えた。

呆然とそれをみていた兄貴は、がっくりとひざを突いてうずくま

ってしまった。

「・・・くそぉ、また敵に回ったのか、メドーサ」

第三話（後書き）

出演サーヴァント
セイバー　：　真名　アルトリア＝ペンドラゴン
ランサー　：　真名　不明　ご飯を食べてる姿に癒されます
アサシン　：　真名　不明　ランサー専属の部下でしたｗ
アーチャー：　真名　不明ｗ　なんだか眩暈を感じています
ライダー　：　真名　メドーサ　ＧＳ世界で超有名人でしたＷ

追記　：　聖杯では純粋な神霊は呼べません。ゆえに、このメドーサは「Ｙｏｋｏｓｉｍａ」の混ざり物です。・・・わかりますね？ｗ

１１／１３　修正しましたー

第四話（前書き）

魔術は秘匿しますが、仲間にはわりとオープンなよこっちW

第四話

何かある、何かあるとおもっていたけれど、忠夫はかなり異常な人間だった。
忠夫の出自は何と異世界だというのだから。
そしてあのライダー、「メドーサ」も規格外だった。
神魔にして反英雄、地中海のメデューサではなく、中華竜の系統の元神族。
忠夫は何度も戦い、そして撤退を繰り返してきたという。
まぁ、忠夫じゃなけりゃ信じないけど、あの宝石剣の翁が気に入るような存在だ、普通であるはずがない。
で、何度か敵対した後、様々な事件を越えて友情をはぐくむことに成功したそうだが、この世界に飛ばされる寸前で神族の暴走にあい、自分をかばって死んでしまったそうだ。

「あいつが何かを求めるなら、俺はかなえてやりたい」

血を吐くような台詞に、私たちは言葉を返せなかった。

「タダオ、一応、その辺は考慮するけど、相手は本人じゃなくて、英霊の座からの分御霊なんだからね、忘れないでね？」

イリヤスフィールの言葉に、今にも泣き出しそうな忠夫は、力なくうなずく。
こんな忠夫をみたのは初めてだった。
でも、踏み込まなくちゃならない。
そのための戦いなんだから。

「忠夫、そのメドーサの能力ってどんなのがあるの？」

「・・・せやな」

忠夫の話を要約すると、

・石化能力を持つ式「ビックイーター」
・封印の力をもつ「土角結界」
・包囲戦滅結界「火角結界」
・飛行能力
・宝具と思わしい、超加速

というのが彼の知る彼女の能力だという。

「最後に見せた転移は、術でしょうか？」

セイバーの問いに忠夫は首を横に振った。

「あれが「超加速」や」
「忠夫、速度という範囲であれば、我らサーヴァントに追えないものではないぞ？」

アーチャーの言葉に忠夫は言いよどむ。
これは、いっても信じてもらえるだろうか、という戸惑いだろう。

「とりあえず話して」

うん、とうなずいた忠夫の言葉の意味を真剣に考えて、私は目の前が真っ暗になった。
韋駄天の神術で、高度に加速された速度と、周囲の時間の流れをゆがめてあり得ない「加速」を得る、術？
アーチャーは、なんというか、こう、そう、悪夢に出会ったかの

ような顔をしてる。
セイバーもその意味を考え、そして絶望的な表情だ。
あり得ないって否定するのはいいけど、逆に忠夫が言ったとおりなら・・・

「・・・あれを使われたら終わる。そういう術や」
「ちなみに、忠夫はどうやって対抗したの？」
「神族側の龍神のバックアップを受けて、こっちも超加速で対抗したんやけど・・・」

忠夫曰く、この世界には神々の痕跡が薄いそうだ。
そこに存在していると確信している忠夫レベルの認識能力がない限り、存在を信用できない、そんな段階まで遠いという。

「まぁ、向こうの世界でも、引退した神様を引っ張り出すにゃ、半径１２ｍぐらいの魔法陣が必要だったしなぁ・・・」

逆に１２ｍ程度の魔法陣で神卸が出来るなら、やってみたい気もするけど、そっちは今度の話だ。

「とはいえ、連発できない、そう考えていいわね？」
「ああ、俺もそう思う。この聖杯戦争のルールで考えれば、エネルギー元は魔術師。人の力であんな術を何度も連発できんわ」

加えて、かなりの集中が必要らしく、感情の波立ちだけでも術が乱れて途絶えるという。
付け入るならその辺だろう。

「でも、信じられないわ、シンジがマスターだなんて」

間桐シンジは、現在の間桐家の長男だ。
場合が場合ならば魔術の家の後継者といえるが、彼には生来魔術回路が存在しない。
ゆえに、血統魔術の継承が出来ず、この代で途絶えるといわれていた。
が、遠坂の次女が養女にだされ、現在英才教育が行われており、サクラによって継承されることになる。
間桐の血統魔術の保存と、遠坂による魔術独占という形でお互いの利益が守られた形になる。
無論、それがどんなに過酷なことなのかを知らないわけではない。
しかし、魔術師という世界を考えれば、それを容認せざる得ない。
すべては根元に至る道のため、なのだから。

「・・・なぁ、凛ちゃん」
「なに？」
「魔術回路がなければ、サーヴァントは呼べない、これは間違いないわな？」
「そうね。ルール設計上間違いないわ」
「でも、サーヴァントにいうことを聞かす方法はあるんちゃうか？」
「まさか、令呪のない魔術師に、魔術師以上の力を持つ英霊が従うワケないでしょ！？」
「そうか？　少なくともセイバーは戦略上の判断と指示は、俺とシロちゃん両方から聞くと思うで？」

・・・つまり、なに？
召還をさせるだけさせて、その令呪を奪うなりマスターの意志を操れば、サーヴァントを持てる、と？
そ、そ、そ、そ・・・・・
「そんな！！・・魔術師を小馬鹿にしたような事をして、何になる

っていうのよ？」

沸騰した感情を何とか押さえることに成功した私は、忠夫を見つめるが、さらに燃料がくべられた。

「魔術師気分が味わえる、ってかんじなんやけど？」

思わず殺気が盛り上がってしまった。

というか、魔術師の根幹を全く理解していない発言だけど、そう考えるとすべて説明が付く。納得など出来ないけど。

「・・・つまり、シンジは、誰かに召還させた英霊を従えて、俺様気分を味わってる、と？」

「何という愚かな」

「・・・ばか？」

「空気が読めていないのです」

サーヴァント女子部もあきれてる。

「・・・ならば、なぜライダーが従っているのか、その点が問題だな」

アーチャーの言葉に、魔術師的な答えを並べる。

「召還者の命令に従っている、召還者の命が握られている、召還者を無視してでもシンジに魅力を感じてる・・・」

「「「「「ないないない」」」」」

・・・アーチャーまで。

息子たちの聖杯戦争は、順調に推移しているようだが、聖堂協会から妙な情報が入ってきた。
冬木の英霊（サーヴァント）と思われる存在が、なぜか「東京浅草」に召還された、というのだ。
あり得ない話なんだけど、確認のために行かなければならなくなった。
僕だけでいこうと思ったんだけど、いつの間にか荷物を積め始めるアイリの笑顔をみると、さすがに一人で行くとはいえなくて、仕方無しに雷画さんに連絡を入れておいた。
あそこならば何かあっても大丈夫だろう、と。

「さ、キリツグ、東京見物ね♪」
「とりあえず仕事が先なんだけどね」

まぁ、子供たちも大ききなったし、新婚旅行気分でもいいかもしれないね。

「パパ、ママ、一応、今、聖杯戦争中なんだけど？」
「うふふふふ、浅草寺～東京タワ～築地～」
「おやおや、築地なんて、朝早く起きれるのなか～？」
「大丈夫よ、キリツグ。愛の力があれば」
「愛が試されるねぇ～」
「わーん！　悔しいからシロウとラブラブグチョグチョヌトヌトになってやるんだからぁーーーー！」

「避妊はしなさいよ～？」
「いやいや、孫というのもいいかもしれないよ、アイリ」
「・・・いいかも」
ふふふ、一年ぐらい東京に行っているのもいいかもしれないね。

なんでか、衛宮夫婦がアインツベルンの仕事を請け負って、東京に行ってしまいましたとさ。

「なに考えてるのよ、あの極楽夫婦はぁ！！」

ほえる遠坂だったけど、俺としてはうれしそうなアイリさんと爺さんを見れたので、結構満足だった。

「まあまぁ、凛ちゃん。うちの極楽夫婦も遊びに行った訳やないんや」

そう、なぜかサーヴァントが東京浅草に召還されたらしいので調査して来いって話らしい。

「・・・そうなると、向こうに行ってるのはキャスターか、バーサーカー？」
「いや、バーサーカーやな」
「なんでよ？」
「だってなぁ？」「うん」

兄貴の振りに俺もうなずく。

「もしかして、戦ったの！？」

「いいや、マウント深山で偶然会って・・・」

「・・・どこのスーパーが安いかとか、特売日とかタイムセールとかの情報交換したんや」

「「は？」」

イリヤ姉と遠坂が、間抜けな顔で首を傾げてる。

「ほれ、この前、葛木先生の婚約者ってのが職員室にきたって話があったやろ？」

「・・・ああ、すごい美人だったってあれ？」

「そうそう。で、そのとき案内したのが俺で・・・」

「その後、商店街で買い出ししてたら再会してん」

そう、職員室に案内したのは召還前で、案内中もむちゃくちゃノロケてた。

あんまりにもレベルが高いノロケに辟易としたんだけど、その話の中で料理が苦手だという話になった。

いや、出身が地中海の方で、日本の調味料とか食材がいまいち理解できないのだが、それでも美味しいと食べてくれる葛木先生に申し訳ないとかなんだとか。

で、召還後に再会した商店街で、いろいろと食材の話やら料理や等の話になっているときに気づいたのが、彼女が「キャスター」であるという事実だった。

とりあえず、事を構えるつもりがないことを切々と説明して納得してもらったところで向こうさんの目的がわかった。

「・・・もしかして」
「せや。葛木先生とラブラブ新婚生活ができるなら、聖杯なんかいらないそうやで」

兄貴の台詞に、脱力の遠坂。
背後でアーチャーもセイバーも倒れそうな顔色だ。
なんというか俺の知るサーヴァント、みんな聖杯にかける意志というか希望が無い。

いいのか、聖杯戦争？

いや、よくよく考えれば、今の状況自体が「狂った」状況の現れなのかもしれない。

「というか、聖杯無しじゃ、現界出来ないから、結局聖杯いるじゃない！」
「いやぁ、そうでもないで？」

苦笑いの兄貴。
ああ、あれ、ね？
というか、反則も反則なんだけど。

目の前の衛宮兄弟を殺したくなった。

体が維持できないなら「人形」に意志を入れればいい、と軽くいう兄に対して、弟も「金以外なら問題ないな」と軽くいう。
「・・・あんたたち、まさかそんなことをしてるんじゃぁ・・・」
「いやいや、俺らは依頼するだけやで？」
「そうそう、一応、前回の成功報酬の一環つうことで、アインツベルンにつなぎをとってもらったんだ」

ま、まさか・・・・蒼崎？

せいかーいと拍手の兄弟を旋風脚でふっとばした。

「もう、リン！　うちのかわいい弟たちを虐めないでちょうだい！」
「なにいってるのよ、イリヤスフィール！！　封印指定の魔術師の話を軽々しく語るバカ兄弟なんか、死ぬべきよ！！」
「そんなに悪い人じゃなかったわよ？」
「いい悪いじゃないわ！　魔術の根幹にして最大目的からはずれつつも・・・」

・・・悪い人じゃなかった？

「もしかして、イリヤスフィール。貴女もあったことが？」
「ええ、だって、この体を作ってくれたのが蒼崎ですもの」

・・・・・・・・・・・・・・・

声もでないとはこのことだった。
聞けば、アインツベルン、小聖杯を人型のホムンクルスで作っていたそうだ。

で、アイリスフィールが当代の小聖杯で、イリヤスフィールが次世代の小聖杯。
が、すでに至ったアインツベルンは、この小聖杯たちを解放することにした。

というか、構っていられなくなった。

そんなわけで、小聖杯としての体はほしいけど本人たちは要らないという状況で、細々とした意見調整も面倒、ではと引っ張り出されたのが件（くだん）の人形師。
意識を人形に移して小聖杯の体をゲットしたというわけだ。
その際に知り合った衛宮とは、いろいろな繋がりで、わりと簡単につなぎがとれるそうだ。

つまり、キャスターへの報酬は、現界にとどまる為の体、と。

「・・・実は、結構、現実的？」
「うん、わりと支払い以外は現実の範囲だね」

・・・気になるお値段は？

「全身だから・・・出産も視野に入れると、一体１２億ぐらい？」
「まぁ、何とかなるやろ」
「なんとかなるの！？　本気で言ってるの！？」
「まぁ、ゼル爺からもらったかけらの複製でも、売ってくれるなら幾らでも出すっていってたしなぁ・・・」
「・・・私がほしいわよ」

とはいえ、カンニング禁止をいわれているので解析するわけには行かないけど。

でも、あの欠片、それが如何に複製であったとしても、本物の何パーセントかは転写されているのだ。
宝石魔術師、いや、あらゆる魔術師にとって如何なる価値となるかは言葉にするまでもないことだった。
というか、あの欠片を複製するって、どんな反則よ・・・・。
まったく、この兄弟には・・・・。

第四話（後書き）

出演サーヴァント

セイバー　：　真名　アルトリア＝ペンドラゴン

ランサー　：　真名　不明

アサシン　：　真名　不明

ライダー　：　真名　メドーサ

アーチャー　：　真名　不明　かなり影が薄いです

キャスター　：　真名　不明　地中海出身の結構な美人

バーサーカー：　真名　不明　極楽夫婦確認中W

１１／１３　修正しましたー

第五話（前書き）

作中で、魔術師の修行に関する記述は、全くのデッチアゲです。

第五話

夜の巡回を始めることにした。

浅草で召還されたのが「バーサーカ」であることが判明したからだ。

バーサーカーである「彼女」は、マスターである少年と共にあることが望みだとか。

つうか、凶化しとらんのか？

『ああ、彼女は理性的で知性的だったよ』

・・・なんでバーサーカーなんや？

『それはね、マスターが他の女の子を視線で追っただけで凶化するそうだ』

こえぇ・・・・・。

なんやその生き地獄。

『一応、バーサーカーもかなりの美人なんだけどねぇ』

『あら、キリツグ。私とどっちが・・・』

『アイリ、君を越える美人がいるわけ無いだろ？』

あー、はいはい、勝手にラブラブしてくれ。

『で、一応、聖杯戦争から抜ける事で了解してもらったんだけど・・・』

ああ、その件は、こっちのキャスターからも希望があったで？

『うわぁ、後何体ぐらい希望でるかな？』

うちのランサーとアサシンも残りたい風。

『・・・資金が一度空になるなぁ・・・』

せやったら、欠片の複製と「文珠」売るしかないわな。

『忠夫、文珠は最後の手段じゃなかったのかい？』

蒼崎さん、エーデルフェルドから再度手に入れてほしいって突き上げがきてるんやて。いい機会やろ？

『そういうことなら、まぁ、向こうには黒桐君もいるから何とかなるかな・・・』

じゃ、仮発注しときます～

『頼んだよ～』

「って、なんてやばい内容を電話してんのよ！？」

「まぁまぁ、遠坂。こんな電波会話、本気にする奴なんかいないって」

「・・・そうね、確かにそうの通りだけど、納得行かない！！」

じたんだを踏む凛ちゃんを、なま暖かい視線で見守るアーチャー。

まぁ、そういう関係だよな、おまえ等。

つうか、シロちゃんも同じ様な視線だな。

気が合うのか、おまえ等。

「ま、ま、まあいいわ。とりあえず、巡回ルートと班分けだけど・・・」

俺とイリヤ姉、凛ちゃんとシロちゃんやな。

「・・・なんで？」
「俺が二体制御してるっている事実を隠すためやな」
「もう、やっとタダオがお姉ちゃん愛に目覚めたと思ったのに・・・」
「ないないない」
「そんなに全力で否定しなくてもいいじゃない！！」
「イリヤスフィール、淑女のたしなみを」
「セイバー、まるで実家のメイド長みたいなこと言わないでちょうだい！」
「もふもふ」「ランサー殿、こ、これも！」

と、まぁ、グダグダだったけど、いざ別れましょうと言うところで珍入者が現れた。

「おいおい、おまえ達、ばかか？」

ワカメヘアーのバカ大将。

「・・・Ｓｅｔ！」
「トレース、オン」
「ハンズオブグローリー」

瞬間的に抹殺できる位置まできていた。
が、その瞬間を飛び越えるのが超加速。
相手の気配を飲まないと、相手の気配を感じないと勝てる相手じゃない。

「ふっ、僕のライダーに勝てるつもりかい？　どんなに強くても、どんなに早くても、僕のライダーには届かないのにね」

ふっはははと笑い声をあげるシンジ。
さて、あいつの命令を聞いているライダーはどこだ？
・・・って、背後で霊体化してる、か。

「ああ、安心していいよ？　ライダーには距離なんか関係ないからね。呼べば現れる、距離も時間も関係なしにね！」

あたかもここには居ないかのように話してるけど、いないとは言っていない。
屑の分際で頭のいいことだ。

「ならば、呼ぶ間も無くその喉を殺せば、危機を守れない、そういうことだな？」

アーチャーのけんのんな視線を受けて、真っ青になったシンジだが、背後からライダーの霊体の腕が喉を守る。

「は、は、はは、そんな脅しは利かないよ？　なにしろ、こっちのライダーは単なる英霊じゃないんだからねぇ！」

まぁ、単なる英霊じゃねぇよな。

一部とはいえ「神魔」なんだから。
とはいえ、なにがしたいんだろうなぁ？　こいつ。
「で、なにが目的なのかしら、間桐君？」
「ははは、なに簡単なことだよ、遠坂」
三流舞台役者のように両手を広げたシンジは狂喜の笑顔でこちらを向いた。
「殺さないでいてあげるから、全員僕に降伏すればいい。なに、絶対服従の契約は結んでもらうけど、なにしろ命が助かるんだ。降伏する方がいいよね？　そっちの方が利口だよねぇ？」
ゲラゲラと狂ったように笑うシンジだけど、こっちはドッチラケ。
つうか、おめぇ・・・・
「シンジ、おまえに降伏しても、おまえ勝者になれねえだろ？」
だって、おまえ、魔術師じゃねぇし。

「だ、だ、だ、だ、だまれだまれだまれぇぇぇぇ！！！！！」

目を真っ赤にしたシンジが、兄貴に殴りかかる。
もちろん兄貴に当たるわけがない。
武術も訓練もなにもしていないシンジの拳なんか、爺さんやアイリさんの攻撃すらよける兄貴に当たるはずもない。

「くそくそくそくそ！！　おまえ達はいつだって、いつだって上から目線で蔑みやがってぇ！！！！！」

汗だくで、血が出るほどの声で。

「お爺さま、お父様も、桜も・・・みんなみんな・・・許せるかぁ！！」

瞬間、シンジは吹っ飛んだ。
でも、なぜかライダーは助けなかった。
殺す殺さないレベルじゃないと助けないのか？

「間桐シンジ、いま、桜が何だって言ったのかしら？」

腕に輝く魔術刻印。
体調不良から死病、物理攻撃まで自由自在の遠坂ガンド。
それが今、シンジをねらっている。
英霊の守りがなく、魔術の守りもないシンジに、ポッコリ黒い穴があくだろうことは間違いない。
なんだかなぁ・・・・。

「衛宮士郎。友人を助けないでいいのか？」

「アーチャー、現在、妹分の件で冷戦中でね。あいつがいなくなることで桜の負担が減るなら、有りかも知れないってレベルまできてるんだよ、うん」
「・・・そ、そうか・・・」

なんかすごく焦った顔のアーチャー。
何でだろうなぁ？

「士郎、それでも友人は・・・」
「ん？　セイバー。味方の友人と敵の知人、どっちを助ける？」
「・・・両方助かる道が・・・」
「価値は等価じゃないよ、セイバー。愛するもの、好きなもの、価値があるものと考えた相手と、敵対している人間が同じ価値な分けないだろ？」
「・・・・・」

俺の言葉を聞いて、うつむくセイバー。
つうか、現在進行形で戦闘寸前なんだけど。気づいてる？　さーばんと諸君。

「戦争で指揮を執ってるのがセイバーだとして、自分の国の国民を助けるより、敵の兵を助けたりする？」
「・・・・！！」

個人の戦闘だから忘れるけど、戦争ってそういうものじゃない。
それを理解してほしいよ、セイバー。
・・・あれ、アーチャーも苦い顔って、どんだけなんだよ、うちの陣営は。

「つうか、なんで兄貴の隣にライダーがいるん？」

俺の台詞に、兄貴はニヤニヤ笑って一冊のハードカバーを見せた。
「これがライダーの制御魔具や、な？」
「ああ、そうだよ、ヨコシマ」
「今は、衛宮。せやから「タダオ」って呼んでくれよ、メドーサ」
「いいよ、タダオ」

なんだかにこやかな雰囲気だな。
そういえば友好を結んだって言ってたっけ。

ライダーの話は、衝撃的だった。
私は桜が幸せに暮らしていると思っていた。
私は桜が平穏に暮らしていると思っていた。
桜を脅かすのは、嫉妬に狂ったシンジだけだとそう思い込もうとしていただけだったのだ。

間桐の家で行われた、行われていた、行われている修行という名の陰惨な虐待、修行という名の卑劣な行為、修行という名の・・・・・

思わず握りつぶしてしまったコップで、右手が赤く染まった。
なぜかアーチャーもイライラとしている。
パスを通して私の感情が影響しているのかも知れない。

「・・・タダオ、私にこんなことを言う権利はないかも知れない。
でも、お願い、桜を助けておくれよ、タダオ、お願いだよ・・・」

涙ながらにタダオにすがりつくライダー。
私もそれに加わりそうになったが、衛宮兄弟の顔を見て踏みとどまった。
そう、忠夫はいい、こいつもかなり「魔術師」だから。
だけど、士郎が、衛宮士郎が透明な表情をしているのがわからなかった。
こいつは、なんというか、義憤で真っ赤になっているはずなのに。

「・・・衛宮士郎、今度は妹分の、身内の話だぞ？」
「・・・といっても、魔術の修行なんやろ？」「そうなんだよねぇ、それも間桐の血統魔法の、その修行」

「「・・・なっ！！」」

思わず私は忠夫を殴りとばし、アーチャーはどこからか取り出した剣で士郎を切りつけた。
が、衛宮兄弟は何の傷も負っていなかった。
なにも、そう、なにも。
光の壁に阻まれ、攻撃は通っていなかった。

「凛ちゃん、魔術の修行ってのは、学校の勉強みたいなもんか？」
「遠坂、俺や兄貴が魔術修行で何度本当に死んだか知ってるか？」

忠夫の魔術根幹による蘇生。
これができるから何度も死ねるというわけではない。
死亡しても即死しても蘇生させられる。

無限の苦しみの中で生き残る。
こうなっては魔術を使うか魔術師をやめるしかないと言う修行。
正気を疑う修行だが、逆に、魔術師らしい修行といえた。
「・・・この前な、何で魔術師ってのは根暗なんやろな、って話しになったんや」
それは基本的に閉鎖された社会で秘匿と秘密の中で生活しているからだという話しに流れたが、彼らの養父が爆弾を落とした。
「それは、ほら、虐待とか精神的な攻撃にさらされて精神的にゆがんでるからだろ？」
聞けば、大きな家であればあるほどそれ専門の教育係がおり、場所によっては廃人寸前まで追い込むそうだ。
が、これによる魔力増大の効果は凄まじく、如何に効果的に追い込むかについて各家で研究が進んでいるという。
「・・・修行で虐待とかムカつくし、殺したいほど殺意はわく。せやけどな、修行の前に聞かれるはずなんや。『魔術師続けますか？』ってな」
忠夫はその点だけは自主責任を背負っているはずだと言う。
「・・・俺は兄貴みたいに割り切れてない。でも、ＳＯＳを出してるなら助けたい」
「ま、確かに追い込まれすぎておかしくなってるかもしれんからな」
・・・たしかに、私は魔術師としてまだまだみたいね。
桜が苦しい思いをしていると思っただけで走り出しそうになった

ぐらいだもの。
衛宮兄弟、思いの外完成された魔術師なのかも知れないわね。
「・・・そうでもありませんよ、リン」
そういってセイバーが指さす先では、テーブルの足がちぎれそうなほど力を込めて握る兄弟達がいた。
「・・・タダオ、ありがとう」
「なに、助け出してからや」
ライダーを撫でるその手をみて、少し安心した。
手のひらが、自分の爪で傷ついて真っ赤になっていたから。

第五話（後書き）

とはいえ、人間っぽい感情を失っては、無限の魔法人生もつまらないのですよw

出演サーヴァント

セイバー　：　真名　アルトリア＝ペンドラゴン
ランサー　：　真名　不明
アサシン　：　真名　不明　ランサーのお世話命
アーチャー：　真名　不明　自分の立ち位置に疑問を覚えています
ライダー　：　真名　メドーサ　愛ある限り戦います
キャスター：　真名　不明　主婦希望。「今度こそ幸せに、なる！」
バーサーカー：真名　不明　結構な美人です。黒髪がきれいらしいです。

１１／１３　修正しましたー

第六話（前書き）

ザクサク内容がザッピングしてます。

というわけで、一部完

第六話

ライダーことメドーサを加えた衛宮&遠坂連合。
サーバントの数は既に5体。
で、戦略的に倒す必要のないサーバントは2体。
もう、なんというか、聖杯みんないらないなら、いいやん、といったかんじだった。

「・・・ご主人様、本当に人間になれる？」
「人間っぽく、でいいなら成れるで」
「おお、それは嬉しいですな」

俺はアサシンを肩車。

「・・・私は、別に戦闘をしてもいいのだがな」
「虫退治はするで」
「ふん、あのムシ爺。滅殺してやるんだから」

稟ちゃんはアーチャーにお姫様だっこ。

「なぁ、兄貴。俺にも強化してくれない？」
「シロちゃん、似合ってるからええやん」

シロちゃんはセイバーにお姫様だっこ。

「似合うゆうなぁぁぁ！！」

まぁ、学校じゃぁ「お嫁さんにしたい男子Ｎｏ．１」やしな。
「旦那にしたい女子Ｎｏ．１」は綾子だったりする。男子からも

支持される旦那。
「とりあえず、シンジはいいとして、桜は助けんとな」
「そうだな、兄貴」

桜の中に埋め込まれた体が目覚める。
どうやら、向こうは襲撃を受けてしまい、負けたのだろう。
屑孫はライダーを奪われたばかりか、敵を引き込んだという役立たず。
どうやって殺してやろうかと黒い感情がわいた。
まぁ、いい。問題は敵勢力だ。
この体に移ったせいか、向こうでの敵戦力が苛烈であったのか、襲撃の瞬間までなにが起こっているかも理解できなかったし、今現在でもどうなっているかもわからなかった。
もうしばらく、そう、桜の体が黒の小聖杯に目覚めてから、何体かの英霊を取り込んでから移ってくるつもりであったが、背に腹はかえられない。
さて、では、桜、おまえの体をいただこうではないか。
思いの外確立されている、この魔力の通りのよい体を。

「おや、間桐翁、いや、マキリ＝ゾウゲン、目覚めたかね？」

開かれた視界の先にいたのは「緋色」の魔女。

封印指定の魔術師。

人形師。

「ああ、すまんね。その体は身動き一つ出来ないし、声も発することの出来ないデクだ。会話なんか出来るはずもなかったよ」

な・・・なんだと？

まさか！　そんなはずはない！！

私のこの体は、いわば桜の心臓そのもの。

心臓を抜き出して処理でもしなければ、そんなことが出来るはずもあるまい。

まさか、まさか、それがされたのか！？

「おお、さすが数百年の時を生きた魔術師の抜け殻。いい勘をしてる」

からからと笑う人形師。

「いやいや、あんたはいわば私に渡された報酬でね。生きた魔力発生機にして魔術図書館ということさ」

なんだと・・・、なぜそうなった・・・。

「疑問は尽きないだろうけどね、意識が戻ったのなら話が早い。早

々にすべてを刈り取って、夢の中で満足な生を生きてくれ。あんたが魔力を作れる間は夢が続くだろうからな」

ゆっくりと意識が黒に塗りつぶされる。
ゆっくりと気力が黒に染まる。
ゆっくりと、ゆっくりと・・・。

一月ぶりの冬木。

俺とシロちゃんは疲労で玄関先に倒れ込んだ。
とりあえず、労働報酬分と桜ちゃんの心臓に巣くっていた奇怪生物の提供で割り引きされた人形制作費の穴埋めで制作手伝いまでさせられたのは計算外だった。
で、器用さで俺が、精密さでシロちゃんが目を付けられ、正直勘弁してくださいというまで勉強させられた。
たぶん、いまのシロちゃんだったら、自分の使い魔を人形で作れるな、うん。
俺も今回の蒼崎師匠のところでの勉強で思いついた「人工霊魂」の作成手法をどうにかできるところまで追いつめた。
後一歩踏み出せれば、向こうのマリアのようなアンドロイドを作れるだろう。

まぁ、ふつうに霊魂を使った方がはやいんやけどなぁ。

「兄貴、もうすぐ終わりだな」

「ま、あとはみんなの身の振り方を世話せんとな」

今回、疑似聖杯戦争を画策した間桐老人は、その自分の行いの精算という形で滅んだ。

さすがにあれはフォローできん。

踏み込んだその場、間桐の修行場で、桜を鍛えている最中だったのだから。

・・・つうか、あの虫、まずいやろ？

下劣そのものやし。

加えてエロエロな顔で孫を言葉責めしているようなジジイ、死ぬべきや。

ということで、稟ちゃんのガンド乱れ打ちによってちりじりにされた。

が、驚くことに、集まってきた虫がジジイを再生させる。

続いてランサーが圧殺したが結果は一緒。

とはいえ魂はその辺にあるから、一応、本体のはずなんやけど・・・。

と考えたところで不意に思いつく。

まさか、デミアンみたいに本体が別か？

とりあえず、ライダーの土角結界で固めて、魂が移動するかを確認したところ、一応動きはなかった。

なかったが、なぜか桜の心臓の部分に魂の糸がつながっている。

そのことを指摘したところで、桜の意識が戻り、そして悲鳴を上

げて気絶した。

まぁ、あのじじいの石像が目の前にあったら、気絶もするわな。

一応、シロちゃんは席を外してもらい、桜の部屋まで運んだ後で、いろいろと桜と話をした。

初めは自分が汚れた存在で、他人とふれあう資格がないクズだと卑下してたんやけど、まず、稟ちゃんの慰めや説得、そして、俺から聞いたEU各国に散らばる魔術名家の修行内容を聞いて目を見開いた。

「・・・わたし、そんなことされたら自殺しますよ・・・」

と、自分の不幸に溺れていた桜ですら同情する修行の内容を聞いて、稟ちゃんも青ざめてた。

まぁ、その方向の深淵は暗いつうことやな。

で、心臓の話を聞いたところ、なんとジジイの本体が桜の心臓に巣くっていて、魔術的にも外科医的にも引きがはし出来ないというのだ。

その話を聞いて、真っ青になる稟ちゃん。

でもなぁ・・・。

「なぁ、長期的には無理やけど、人工心臓じゃ、だめなんか？」

「「「「「あ・・・・」」」」」

で、この分野、科学も魔術もかなり進んでるし、大概の無茶がきく。

実際に心臓が壊されても、かなりがんばれば自力で修復できるの

だ。
だから、外科的にでも何でもいいからひっぺがして、心臓の代わりの代替心臓で桜を生かして、で、その間に魔力をたたき込んで修復させればいい。
まぁ、こっちの方が先だけどな。

なんというか、魔術とか常識とかをすっ飛ばした話だけど、桜は救われる。
まず、肉体的には心臓が移植された。
どうやって手に入れたかはしらないけど、さすがに適合率１００％、って無茶よね。
加えて、疑似魔術回路となっていた刻印虫と呼ばれている魔法生物が除去され、魔術的な負荷が全て無くなると、急速に肉体修復が進み、生活できるようになるまで時間はかからなかった。
が、忠夫曰く、魂に問題はないけど霊体がぼろぼろなので、肉体を無理矢理魔術で修復しているだけとのこと。
つまり、あの体では寿命が短い。
結果、魔術的にいえば、最終的に魂が人形に移される。
一体ついかーと言った忠夫を叩きのめして、桜にその話をすると、輝く笑顔になった。
「はじめてを、先輩にあげられる」

あー、あー、わかったわかった、はいはい。
まぁ、その気持ちは乙女的にはわかるんで、いいけどね。
でもね、処女で少女で巨乳で経験豊富でって、どんだけ男の夢を詰め込んでるのよ、あんた。

・・・

そんな処置が終わったところで、忠夫が蒼崎に連絡をしたところ、抜き取られた心臓にしがみついている怪生物を引き渡すなら、大幅値下げをしてくれる約束が出来、じつにありがたかった。
さらに、桜から「黒の小聖杯」であった自分の体の提供のかわりに、人形制作が提案され、向こうでも大喜びとなった。
なにしろ、アイリスフィールとイリヤスフィールの肉体が押さえられなくて、実に悔しい思いをしたそうだから。

さすがに今以上の値引きは無かったが、以降の繋がりが出来たのはおもしろい縁だと思う。

で、その事前準備と手伝いということで、忠夫と士郎が向こうに行って一ヶ月。

やっとこさ帰ってきた。
結果で言えば準備完了。
土角結界で消耗を押さえられたサーバントたちを輸送しつつ、桜もつれて私たちは小旅行としゃれこんだ。

アイリ母さんと爺さんと合流して、両儀家が準備した仮設工房へ全てを搬入した。
運び込まれたのは5体のサーバントの土角石像。
アーチャーとメドーサは帰還を望んだからだ。
答えを得たと満足げなアーチャーに比べるとメドーサは未練が深いようだった。
でも、自分がこのままとどまれば、神魔に目を付けられるだろうから、と彼女は言う。
さすがに神魔そのものを相手することなど、魔法使いぐらいしか不可能だろう。

「またあえる。今あえたんや、また会える」

そういって、きえゆくメドーサと兄貴が抱き合っていたのは印象的だった。

「ねぇ、タダオ。メドーサのこと好きだったの？」
「・・・家族みたいな関係だった。俺はなぜか人間より魔族やら怪異に好かれてね。だから、こんな別れをまたすることになるとは思わんかった・・・」

泣き崩れる兄貴を、遠坂とライダーが抱きしめる。
アサシンも顔をぐちゃぐちゃにして兄貴に抱きついていた。

そんなことを思い出している中で、作業はどんどん進む。
実際、人形制作の部分でなら手伝えるけど、核心部分じゃ俺の手

伝えることはない。
兄貴は、いろいろとレアスキルを持っているんで、最後まで手伝えるらしいけど。

「タダオ、安定させろ！」
「はい！」
「タダオ、ルート確認！」
「はい！」
「タダオ、ちゃ、いれろ！」
「それ、シロちゃんでええやろ！？」

やばいやばい、さぼってる、俺。
茶は兄貴より俺の方が旨いし。

久しぶりに帰ってきた我が家には、かなり住人が増えた。
士郎と忠夫が呼び出したサーバント達。
セイバー・ランサー・アサシン。
いや、アルトリア＝ペンドラゴン、呂布、陳宮という歴史上の英雄達。
そして、現在リハビリ中で我が家に逗留している間桐桜嬢。
加えて彼女の補助をかってでている遠坂凛嬢。
二人の少女はそれぞれ士郎と忠夫に懸想しているらしい。

そんなものだから、イリヤの機嫌が悪すぎる。
まぁ、どっちも君の弟なんだから、それでいいじゃないか？

「キリツグ、わかってないわ！　どっちも家門の女のよ、それを奪われて、ヘラヘラしてられるわけ無いわよ！」
「しかしね、イリヤ。一応、二人とも弟だし」
「これだけキリツグやママが教育してるのよ？　衛宮の魔術師なのよ？　その辺の感覚が薄すぎるわ！」

実に魔術師的に正しい話だけどねぇ。

「でもね、イリヤ。ママはこう思うの。ゼロサムゲームに救いはないわ。だったら、みんなで共有すれば？　ママみたいに・・・」

あ、あ、あ、あ、アイリ？

「ふふふ、知らないとでも思ってるのかしら？　それとも知られていないとでも勘違いしていたのかしら？　ふふふふふ」

や、やばい、これはまずいよ。

「忠夫、士郎、僕はしばらく旅にでるから！」
「逃がさないわよ、キリツグ！！」

ああ、青い明日に向かってジャンプだ！！

第六話（後書き）

というわけで、「ＧＳ　Ｆａｔｅっぽい何か」一部完です。
この後の展開も無いわけではないのですが、区切りのいいところまで書けていないので、誕生日記念アップはここまでとさせて頂きます。

評判が悪くなければ、続きをアップさせていただきたいと思います。

出演サーヴァント
セイバー　真名　アルトリア＝ペンドラゴン（Ｆａｔｅ原作）
ランサー　真名　呂布　（恋）（真・恋姫無双）
アサシン　真名　陳宮　（音々音）（真・恋姫無双）
ライダー　真名　メドーサ（ＧＳ）
アーチャー真名　エミヤ＝シロウ（Ｆａｔｅ原作）
キャスター真名　メディア（Ｆａｔｅ原作）
バーサーカー真名　関羽　（愛紗）（真・恋姫無双）

何気に恋姫率が高いｗ

１１／１３　修正しましたー

第七話（前書き）

セカンドステージの開始ですが、ちょっと時間軸は戻ります。

第七話

～仮設工房での話

流石、三国志時代の英雄同士、ランサーとバーサーカー、そしてアサシンは知り合い同士だったらしく、同じ時代世界からやってきていた。

まぁ、あの三国志の英雄同士だし、そう言うこともあるだろう。

さらには近似平行世界からの召還らしいので、俺たちの知る歴史とはちょっと違うらしく、呂布、関羽、陳宮、彼女ら曰く、同じ陣営だったそうだ。

言葉少ななランサー「呂布」と割と多弁なバーサーカー「関羽」というのも面白いと思う。

というか人形に移ると、クラススキルがなくなるらしいのでそういう仕切はなくなるかもしれない。

そういう面では、バーサーカーのマスターである浅草出身の北郷君は、このバーサーカーの体を人形に移す作業で最も利益を得ることになるはずだった。

なにしろ、凶化の属性からバーサーカーが解き放たれるのだから。

結構マジで泣いてたし。

「これで、俺の日々の平穏が・・・」

始めてみたとき、バーサーカー、いや、関羽は、実に凛とした佇まいの美女で、スタイルも恐ろしいものがあった。

最初に見とれたときなんか、なぜか桜に思いっきり抓られたし。
そんな彼女が人情に魂を移されると、実にたおやかな佇まいで、なんというか可愛い感じになった。
北郷さんも無茶苦茶嬉しそうで、イチャイチャしていたんだけど、次々と魂を移したサーヴァントたちに視線を移していた北郷さんをみて、なぜか凶化した関羽。
その様をみて、ああ、サーヴァントの本質に関わる部分でクラススキルに英霊は呼ばれるんだ、となぜかみんな納得できてしまった。

英霊　関羽、特徴嫉妬による「凶化」。

人形に移った後なのに凶化した彼女をみて、本気で彼女を召還できなくてよかったと思ったのだった。

が、兄貴曰くそんな関羽の凶化を「可愛い嫉妬やな」で済ませているあたり、兄貴が本来いた世界ってどんなにドメステックでバイオレンスなのか疑問に思う。

ともあれ、希望者全員の受肉が終わったところで、打ち上げになったんだけど、かなり盛り上がってしまった。

何しろ三国一の空腹英雄「呂布」、腹ぺこライオンハート「アルトリア」、暴食の魔神「忠夫」がいるのだから、作っても作ってもおいつきゃしないわけで。
俺と桜と遠坂がフル回転で調理しているところで、援軍登場。

「お待たせしました、若」
「イリヤ、シロウ、来た」

アインツベルン本家から、イリヤ姉付きだった二人のメイドがやってきて、手伝ってくれることになった。
ところでセラって、俺のことは「若」ってよぶのに、兄貴のことは「忠夫様」、イリヤ姉のことは「イリヤ様」って呼ぶんだよな。

何か意味があるのか？

「はい、ご主人様、あーん」

傍目でみると、関羽と北郷さんはラブラブ新婚さんだ。

「あ、愛紗、そ、そ、それは、誰が作ったんだ？」
「・・・私が、愛情のすべてを込めて作りました（ぽっ）」

やべ、ありゃ、「まずい」。
流れてくる臭気だけで目にしみる。
劇物どころの話じゃないぞ、あれ。

「し、士郎、あれ、大丈夫なの？」
「やばいな、だって、ほら・・・」

遠坂は俺がしゃもじで指した先、フードファイター三連星をみた。
徐々に手元の料理を引き寄せながら離れていっている。
さすがに「あれ」が「やばい」ものだってわかるよなぁ、うん。

「おや、恋。どこにいく？」

何となく気になったのだろう、関羽が呂布に視線を向けた。
その視線は何も込めているものはないのだろうが、瞬間「ビクリ」とした三人。

さすがの兄貴も視線を逸らしている。
「あの魔乳！」とまで言っていた関羽の胸すらみないで。
「・・・ふたりっきりにしてあげる」
無表情、であるはずだが、絶対に焦ってることが解る口調だった。
「ふふふ、さすがは盟友、わかってくれるか」
う、うめーーー、呂布最高！
無茶苦茶素晴らしいファインプレーに、周囲喝采。
関羽も祝福されていると思ってか、真っ赤になって照れている。
じつに「ほっこり」とした空気だ。
だから
「逃がしはせんよ」
「・・・は、離してくれ」
こっそり逃げようとした北郷（いけにえ）を押さえつける。
「ぁ、あれを食わされたら、し、死んでしまう・・・」
「だったら正直に教えてやれって。おまえの料理はまずいって」
「ぐ、ぐぅ、それじゃあ俺の命は・・・」
確かに、死ぬかもしれないな。
が、ここで引かない女、前進！
「あのねぇ北郷君。貴方は関羽が怖いから付き合ってるの？」
「ち、ちがう！！　おれは愛紗を、好きだから・・・」

よし、これで退路はない！
俺、前進！

「だったら、かなり危険かもしれないけど、避けられない道だろ？
愛する彼女のために前に進めよ」

俺ならイヤだけどな。
いわゆる「必死」もしくは「必殺」だし。
とはいえ北郷（いけにえ）、かなり気合いが入ったらしく、一口食べてから感想をいうと突進。

「もちろん」一口食べて・・・悶絶した。

「ご、ご主人様ーーーー！！」

あ、泡吹いてる。

兄貴と呂布が手を合わせて念仏を唱えだした。
あれ？　ちょっと光ってる北郷君が体から抜け出そうとしてる。
あ、にこやかに手を振ってる。
がんばれーーーー。

「ご主人様、いかないでーーーー！」

超毒料理人関羽。
たぶん、中華街の関帝さまは、毒殺の神に違いない。
もしくは嫉妬神。

暑苦しい覆面男たちが集う聖地に違いない。

そんなこんなで関羽と北郷（ゴットスピード）は、東京浅草へと帰り、俺たちは冬木に帰ってきたのだった。

第七話（後書き）

えー、実際の中華街の関帝様は、嫉妬の神ではありませんw
もちろん、毒殺の神でもありませんのでアシカラズ・・・。

以下いいわけー
・バサカの凶化属性　：　正史においては呂布のほうが高適正ですが、恋と愛紗とどちらが凶化適正が高いかというと・・・ねぇ？w
・メドって神魔だし　：　GS世界の神なので、そのへんは・・・w
・恋姫率たかくね？　：　シュミです！
・アーチャーとバーサーカー空気？　：　あー、ほれ、ね？
・忠夫、押え役？　：　まぁ、二度も少年時代を送ってますので
・GSメンバーって出る？　：　メドの決意が吹っ飛ぶレベルで出ますw

第八話（前書き）

ＧＳ第一陣、とうとう現れました！！

第八話

愛人の存在をアイリ母さんに感づかれた親父は、ぼろ雑巾のようになって帰ってきた。

アイリ母さんに引きずられて。

おとこやな、と俺が感心すると、なぜか呂布と凛ちゃんに睨まれてしまう。

なんでやねん・・・

まぁ、それはさておき。

我が家も一気ににぎやかになったもんやと笑っているところで、気配を感じた。

それは・・・

「みつけたのねーーーーー!!!!!」

脳天気でありながら、必死さを感じさせる声だった。

見上げた空間はゆがみ、そこにはなんと懐かしい姿。

そう、

「駄女神(ヒャクメ)!」

「よこしまさーーーーん!!」

結構豊満な体を抱きしめると、彼女は泣き始めた。

「よこしまさん、よこしまさん、よこしまさん！！」
「おーおー、泣くな泣くな」
気付いてみれば、突然現れたヒャクメに周囲呆然。
とりあえず説明しとかんとな。
「あー、俺が別世界から来たのは話したやろ？　そんときの仲間がこいつ。神族のヒャクメや」
かいぐり撫でてると、なぜか陳宮がうらやましそうにしてたので、空いてる手で撫でてやると、うれしそうに頬をゆるめる。
「あー、ごめんなさいなのねぇ。感動して暴走しちゃったのねぇ」
見える範囲の目という目が泣いているのはいささか不気味かも。
さすが元妖怪出身。
「いつもいつもそのネタはひどいのねぇ！」
ぱーんと突っ込むヒャクメに周囲が首を傾げる。
「ああ、こいつはな、一目見ただけで前世まで透視できるっていう心（神）眼持ちなんだ。だから、心で思ったことにつっこみ入れるなんつう便利な会話も出来るんや」
「あ、兄貴、それ、便利なのか？」
「だって、こいつにかかれば、性癖から本心のことなんか全部ばれるんだぜ？　だったら、思いっきり本音だけではなせるやん。便利やで。な、駄目神」
「うーーー、こんな気楽につきあってくれるのは横島さんだけだけど、心の底から駄目神とか思われてるのは心外なのねーーー！」

どこからか出したハンカチを噛むヒャクメを、どこか恐々とみている家族。

「ま、怖いと思う気持ちはええけど、隠さないでくれ。表面的に友好的だっていう態度が一番嫌らしいんでな」

何となく、家族は解ってくれた模様。

「わたし、リズ。ヒャクメ、よろしく」

「わかったのねぇ～」

どうやら何か通じあうものがあったようだ。

「で、ヒャクメ、今頃なにしに来た？」

「ひどいのね、横島さん！」

「あー、ここじゃぁ、衛宮なんで、忠夫って呼んでくれ」

んー、っと何か考える風だったヒャクメは、にっこりほほえんだ。

「わかったのね、忠夫さん」

なにがうれしいのか、無茶苦茶上機嫌のヒャクメ。

「・・・あ、そうそう、ひどいのね、忠夫さん。ワタシは、ずーっと徹夜で忠夫さんを捜してなのに」

どうやら、行方不明になっていた俺を、世界の壁まで越えて捜索してくれていたらしい。

「そっか、苦労させたな、ヒャクメ」

思わずなでると、うれしそうにほほえむヒャクメ。

「で、忠夫さん。いつ帰るの？」

「「「「「え？」」」」」

思わず目が点になる家族、と俺。

「え、俺帰れるの？」

何しろ神魔の攻撃を日々受け続けた俺だ。

あの世界に帰っても平穏無事とはいえないし。

「あー、その件なら、神魔両方の最高責任者が粛正したから、結構平穏になってるのね」

さっちゃん、きーやん。

あいつ等の粛正か・・・、きついんやろうなぁ・・・

「兄貴、そのさっちゃんときーやんって？」

「ああ、神魔の最高責任者、イエ○＝キリ○トとサ○ンのこっちゃ」

「「「「「ぶっ！」」」」」

思わずお茶などを吹く全員。

「た、忠夫、君は面識があるのか？」

「焼き肉を奪い合う仲やけど？」

「・・・あはははは、さすがに、ちょっと・・・」

Ｏｒｚ状態で動けない爺さん。
まぁ、わからんでもないけどな。

「・・それより、タダオ！　帰っちゃうの！？」
「そうそう、忠夫、もしかして、帰るとかいわないでしょうねぇ！」
「・・・恋、ご主人様と一緒」
「恋殿とねねは一心同体なのです」

イリヤ姉、凛ちゃん、ランサーアサシン、いや、恋とねねは、すごく困った顔をしていた。

「あー、とりあえず、帰んないとだめか？」
「・・・みんな待ってるのね～」
「それは嬉しいけどよ、さすがに神魔の過激派なんて存在に追い立てられるのは、もういやだぜ」

それに、みんなが守ってくれている、というのも勘弁してほしい。

「・・・やっぱり戻るのが怖い？」
「つうか、長いことあってないからみんなに会うのが怖い、かな？」
「大丈夫なのね。一週間程度しかたってないから・・・」

・・・一週間？

「そうなのね。　もう、一週間も徹夜で苦しんだのね」

まいった、どういうこった？
時間の流れが違う？
いやいや、起点ポイントが違う？
・・・ちくしょう、全くわからん。

そんな俺をみていたヒャクメは、鞄を開いてタイプを始めた。

「・・・ん～、そういうことなのね～。いわば忠夫さんは転生したようなもの、なのね？」

「あー、そんな感じだな」

たぶん感覚的に間違っていないはずだ。

世界線を跨いだ影響で、俺は、この世界に適合するように「生まれ変わった」のだろう。

逆に、この世界とあの古里の世界に大きく変異があった場合、帰ることは不可能だろう。

「忠夫さん、その考えは合ってるのね～。でもこの世界と私たちの世界との差はほとんどないのね～」

大気の組成とか、物質の右巻きとか左巻きとかは？

「忠夫さんからそういう質問があるのは違和感があるのね～。で、一応、原子の数から物質管界の制限まで一緒なのね～。ただ、神話の世界が遠いせいで、私の消耗が激しいのね～」

・・・やべ、じゃ、文珠。

「助かるのね～」

第八話（後書き）

さて、ここで時差が判明しました。
十数年を過ごした男と、一月に満たないＧＳ世界。
じつは思いのほか重い問題が横たわっています。
本当に重い想い。

第九話（前書き）

ＧＳ世界でも、かなりの評価が分かれる紳魔。

魔術師世界では、すでにバケモノ扱い、ですが、そこはそれエミヤん家ｗ

第九話

忠夫の世界の神様が独り言を言っているように見えるけど、あれは思考を読みとる神との会話だそうだ。

そう、神。

一神教に於ける神ではないが、神格を備えた存在。
あまりにも隔絶したその力にめまいを感じた。
その力、その気配、その魔力。

サーヴァントなど目じゃないレベルだった。

魔術師なんか正面に立つことも出来ないほど隔絶の力量差に気後れしていたんだけど、余りに俗っぽい話をしているのをみて気が抜けそうだった。

「ふむ、異界の神族がやってきた、か」

不意に現れた老人をみて、私は息をのむ。

「大師父！！」
「お、じいさん、久しぶり」
「ん、珍しいのがいるんで、見に来たぞ？」
「うっわぁ・・・、スゴいのがきたのねぇ・・・」

和気藹々と人外たちが笑っている。
なぜか士郎や桜が台所に走る。

極楽夫婦が酒や飲み物の準備を始める。

「って、なにしてんの」

「え？　ゼルさん来たら、宴会って法則が・・・」

魔法の人外、すでにこの家じゃただの客じゃない。

まぁ、この家自体が人外魔境だって言えばそうなんだけど。

「遠坂も手伝ってくれよ」

「・・・あー、はいはい」

この家の中じゃ、常識振り回しても仕方ないしね。

というか世界常識も魔術常識も通用しない時点で何も言えないわよね。

「で、この世界に渡ってこれるのは、どのレベルの神魔なんだ？」

「中級の上以上なのね」

「ほぉ、それはどのぐらいの強さなんじゃ？」

「そうっすねぇ、ゼル爺が真っ向から戦って、ちょっとコッチが負傷するかも、ってかんじっすね」

「ふむ、それで倒せるなら問題ないのぉ」

忠夫、それってどんな化け物よ。

「基本、向こうの世界の強さには上限がないんで、数えるだけ無駄だな」

「そうなのねぇ。霊力の強さが本当の強さじゃないのねぇ」

ん？　どういうこと？

「ほれ、たちえば、アルトリアの直感」

あ、ああ、なるほど・・・。

思わず納得した私だけど、士郎は解らなかったみたいだ。

「どういうことだ、兄貴」

「あんな、相手の全力や技を出す前に引っかけられれば、結構勝てるもんやで？」

「あ、そういうことか」

そう、いわゆる、ピンチはチャンス、ってやつね。

これはセイバー、アルトリアに限らず、剣豪や達人と呼ばれる階位の人間の特長とも言える極みの話になる。

攻撃軌道というのだろうか？

先読みや先手や後手のせめぎあいによる戦いは、その極みにないものには解らないけど、逆にその極みにあるものからすれば当然だ。

そして極みの先にあるものからすると、相手の全力の前に討つことも戦術になる。

「だからな、俺たちは『それ』を極めて神魔とだって戦った。それが向こうの世界の戦いやった」

「さすがにそこまで極めていたのは忠夫さんか美神さんぐらいだったのね～」

「そんなこと無いやろ？　『人間以上』なんて戦術の一つや」

「兄貴、その『人間以上』ってなんだ？」

忠夫の語った「それ」は想像を超えるものだった。

テレパシー能力者によって全員の意志をつなぎ、戦術を考えるもの、結界を維持するもの、先を見通すもの、そして攻撃を担うもの。

人間の個性をすべて結集した群体としての人間、最小単位の「軍隊」を一個の人間とした力、それが「人間以上」。
確かに、個人の力を超えるための、人間が編み出した人間が行える人間以上の力を出すための技と言えた。

「あれは、各『極み』に達した『到達者』っちだから出来たのね。忠夫さんや美神さんみたいに単体で越えてしまった『超越者』とは違うのね」

おもしろい表現だと思った。
そこに至り、到達したもの。
至ったそこを乗り越えたもの。

「そういう意味では、あなたは超越者なのね」

神眼の女神の指が、私を指した。
え、え、え？　わたし、超越してるの？

「ウッカリで」

そんな評価欲しくないわよ！！

第九話（後書き）

到達者、超越者、越人などの設定は、まったく公式なものではありません。
この二次創作のなかだけのものだと思って下さい。

とはいえ、うっかりの超越者、これは決定ｗ

第十話（前書き）

てなわけで、十話です

第十話

いい感じで凛ちゃん落ちが付いてしまった。

とはいえ、この家の中では、シロちゃんは一般人＋アルファ、凛ちゃんが「準達人」、おやじたちは「達人」、ゼルじいさん「超越者」の上位、ってとこだろう。

俺は半人前の「越人」ってところだろう。　越人というのは「達人を越えたところにいる人間」という妙神山のオリジナルカテゴリーだ。

で、実は桜がある意味「越人」だったりするのは微妙に秘密だ。

で、サーヴァントはみんな「越人」。

召還されたときは「超越者」の下位だったけど、人形になってクラススキルがなくなったため、クラスダウンしている。

例外だけど、キャスターこと葛木メディアさんは「魔術」の分野で超越者、関羽こと北郷愛紗さんは「凶化」の分野での超越者。

で、恋も武術の分野だけで見れば「超越者」と言えないこともない。

ともあれ、一般生活じゃ意味のない話だわな。

「ん、忠夫殿。口の周りが汚いのです」

にゅっと恋の膝元から俺の口元を拭いてくれるねね。

まるで子供に世話されているかのような感覚に苦笑い。

「ご主人様、子供みたい」

「あー、恋。ご主人様はやめようか？」

「・・・？」

なにせ、イリヤ姉やら凛ちゃんの視線が痛いから。

「なんじゃ、天下の呂布をメイド扱いか、忠夫」

「じいさん、めんどくさい事いうなや！！」「・・・ご主人様、恋のこときらい？」

「んなはずないやろ、大好きやで」

「・・・ん～」

なぜかすり寄ってくる恋。

で、こっちもなぜかすり寄るヒャクメ。

「・・・なにしてるんや、ヒャクメ」

「ん～、悔しいから、向こうのみんなの分甘えるのね～」

なんのこっちゃ。

「あ、あの、ヒャクメ様・・・」

「き、き、聞きたいことがあるんですけど」

イリヤ姉と凛ちゃんが、緊張バリバリでヒャクメを見ていた中で、一歩近づいた。

「「向こうで忠夫に女はいたんですか！？」」

「・・・・！」

俺、絶句。

ヒャクメもスゴく痛い顔になった。

「あー、それ、話さなにゃ、ならんか？」
俺のその台詞を聞いて、二人はひどく動揺していた。
何故かわからんけど。

見たこともないような表情で、忠夫が席を立った。
「ちょっとはばかり」と言っていたけど、その話題から逃げているのがわかる。
そう、まるで泣きそうな笑顔だった。
でも、この一歩は逃せない。
踏み出さなけりゃならない一歩だから。
そう、勝からには華麗に、優雅に。
それが遠坂の心意気。

「簡単に言うと、ほんの数ヶ月だけ、心の底から愛し合った恋人がいたのね」

・・・だけどあの表情、そして期間を熱望しない理由、それは明らかだった。

「そして忠夫さん、そう、横島忠夫が『超越者』となった戦いで、彼をかばって死んでしまったのね」

ゆえに、未だ癒えない傷と共に歩む。

それが忠夫なのだろう。

「でも、そんな忠夫さんを癒そうとした女性は多いのね」

そう、そこ、そこが本題よ！！

そこんとこ、くわしく！！

えーっと、何人よ、というか、人間じゃない方が多くないかしら？

美神、氷室、六道まではいいわ。

シロという人狼、タマモという妖狐・・・って、あの九尾の狐！？

アジア地方じゃいくつも大国を滅ぼした大妖怪じゃない・・・。

机妖怪に猫又、ワルキューレって、あの戦女神！

小竜姫って龍神にパピリオって魔族、魔族ぅ！？

・・・やばいわ、本気なのかしら？

向こうが本気なら、人間以外が大挙でこっちに来て、協会に捕捉された上で魔術大戦争が起きるレベルじゃないの。

お姉ちゃんレベルなら負けるつもりはないけど、正直「神霊」相手に勝てると思うほど思い上がってないわよ。

「イリヤ、何でそんなに不安そうなんだい？」

「だって、キリツグ！！」

「イリヤ、君が忠夫たちと歩んだ道は偽りでも何でもないんだよ？

もし、忠夫が受けた傷が少しでも癒されているのなら、それは君

も癒していたんだからね？」
「・・・キリツグ」

そう、聞いた話がすべて本当なら、今のタダオと別人のように傷ついていたはず。
それを私たちに知らせないほどには強く、心を維持できるほどになれていたんだ。
だったら、それを出来るように出来た自分たちを、家族を誇ろう。
確かに今は動揺しているかもしれないけど、再び笑顔を向けてくれるだろうから。

まぁ、なんつうか、考えないようにしていたというのが正直な話だった。
向こうの世界に帰れない。
だから、考えない。
単純に逃避だな。
でも、帰れる目が出来て、それも何の問題もないと聞いて心が少し動いた。
そう、本当に少しだけ、あの懐かしい世界を思い出してしまった。

美神さんがいておキヌちゃんがいて、シロとタマモがいた向こうの生活。
お隣の子鳩ちゃん、サービスしてくれた魔鈴さん、追試に付き合ってくれた愛子、わりと一緒に仕事をすることが多かった冥子ちゃん。

・・・みんなにとっては一週間しか経っていないらしい。

やばいな、と思った。
あれから十年以上経っていると思っていたから、それなりに諦めていたのに。

今帰れば、あの日々を何の障害もなく始められる。

そう、考えただけで震えてしまった。
捨て去ったはずの日常を、過ぎ去ったはずの日々を思って、体が、心が、ガタガタと震える。

いや、ちがう。
俺は怖いんだろう。

俺はあの日常のために、『この』日常を捨てられるのか、と。
なんつうヘタレや。なんつうアホや。
信じられん。
信じられへん。
せやけど、せやけど・・・・・!!

思考の迷路に陥っていた俺を、ふわりと抱きしめてくれたのはアイリ母さん。

「タダオくん。いいのよ、貴方の思うままになさい」
「せ、せやけど・・・」
「向こうにご両親もいるんでしょ？　だったら一度ご挨拶にいきましょ？　それから決めればいいわ」

ゆっくりと振り向くと、そこにはにこやかな笑みのアイリ母さん。

「そりゃ、可愛い息子をとられたくないっておもうけど、向こうにもそう思ってる母親がいるの。だったら、向こうにも教えてあげなくちゃ。無事に暮らしていますって」

あー、でもあのお袋が、あの母親が、そんな心配してるやろか？

「こら、タダオくん。子供を心配しない親はいないわよ？」

軽く拳を当てられて、俺はうなずいた。

その瞬間、俺はあの懐かしい世界への一時帰郷を決めた。

が、それが後の大騒ぎになるとは思わなかったのだった。

第十話（後書き）

というわけで、一時帰郷決定です！

第十一話（前書き）

ＧＳ世界の話が少し進みます。

第十一話

「恋もいく」「ねねも行くのです！」

まぁ、この二人は予想していた。

「ふふふ、向こうのご両親にご挨拶しないと」「そうだね、二度目の新婚旅行が異世界だなんて、とてもロマンチックだね」

はい、極楽夫婦も仕方ない。

が・・・！

「私もいく！！」　と、我が家の長女と、「わたしもいくわよ！」とこの土地のセカンドオーナー様はどうかと思ってる。

どっちもまずいやろ？

「「なんでよ！！」」

まず、凛ちゃん。セカンドオーナーが管理かまけちゃまずかろ？

「桜に代行依頼してるし、一年以内なら留学だって言い切れるわ！」

・・・まぁ、ええ。

でもな、イリヤ姉。生徒会長様が引き継ぎなしで出奔はまずいやろ？

「ふっ、何のために普段から一成に仕事を押しつけていると思うの

？　私がいなくて困るのは、盗撮組織ぐらいなものよ！」

・・・それでええんか、生徒会長！！

つうか、ぜっちに説得に応じない目しとるわ。

「兄貴、つれてけよ」

「・・・シロちゃん」

「こっちにいて、心配の余りに八つ当たりされたら、生きてられねぇから」

・・・いい根性になったなぁ、シロちゃん。

まぁええわ。

「桜ちゃん、戻ってくる頃には既成事実を打ち立てるんやで？」

「お任せください、御義兄様！！」

「まて、兄貴、桜！！」

「まぁ、三日も夜に忍び込めば、砂糖柱並に脆いシロちゃんの理性が崩れるのは確実や」

「ご助言、感謝します、御義兄様！」

ま、家のことはセラもリズも・・・

「私も参りますよ、若」「リズもいく」

そりゃそうか、アイリ母さんもイリヤ姉さんも行くんだし、親父も俺も行く、こりゃ行かないワケないか。

するってえと、残るのは、アルトリア、シロちゃん・・・。

・・・やべ、桜、焚き付けすぎたか？

こりゃ、タイガー呼んでおかないと、マジでシロちゃんの貞操が

危ういな。
絶対に桜とアルトリアが組んで、色々と仕掛けるんだろうなぁ・・・。

助けを求めるようにシロちゃんが親父を見たけど、親父はにこやかに「グットサイン」。そしてアイリ母さんは「殺(や)ってよし」とニコヤカにほほえむ。
・・・うっわー、いい笑顔だぞ、アルトリアと桜。

本気でタイガー召還だな。

「あ、兄貴、俺も行った方がよくないか？」

・・・アルトリアと桜の視線が怖いので断る。

「あにきーーーーー！」

あ、イリヤ姉さん。
シロちゃんが心配なら残った方がええで？

「大丈夫よ、タダオ。シロウはもう、『お姉ちゃん好く好き愛してる教』の枢機卿だから」

なんや、その邪教は。

世界境界線を越えて飛ばされた横島さんが、この世界に帰ってくることがわかり喜んだ私ですが、一概に喜んでいられないことがわかりました。
何しろ横島さんは、主観時間で十数年向こうの世界で過ごしていて、そして向こうには家族が行るのですから。
そう説明したところ、妙神山にやってきたみなさんが驚いていました。

「「「「「か、か、家族ぅ！？」」」」」
「あの、エロガキ！　け、け、結婚なんかしてやがったのぉ！？」

いえいえ、美神さん、そうじゃなくて、世界境界線を越えた影響で年齢が巻き戻り、そしてその世界の存在として、概念的な転生をしたようなんです。
だから、十数年といっても、高校二年ぐらいですよ？

「じゃ、じゃぁ家族っていうのは、育ての親って事ですか？」
「はい、おキヌさん。養育してくださったご両親とご兄弟がいらっしゃるそうです」
「・・・へぇ」

色々と関心なさったようです、みなさん。

今、横島さんが置かれている状況や、その家族構成、友人関係などを説明し、そしてそのご家族が挨拶に一緒にやってくると話したところで、美神さんの眉があがりました。

「・・・つまり、単純に帰ってくるってわけじゃないのね？」
「「「「「「・・・・・え！？」」」」」」

さすがですね、美神さん。
そう、横島さんは、こちらの世界並のしがらみを抱え、十数年の中で生活を確立してしまったんです。
いわば、横島忠夫の上書きで別人になっていたようなものです。
望郷の数年のうちならばよかったのですが、すでに別人として生きてしまった彼の苦悩を考えてあげてください。
残留か帰郷かを悩んでいた彼の背中を押してくださったのは向こうの養い親である義母様です。
生み育ててくれた実のご両親やお友達がいるのだから、残るにしても帰るにしても一度直接無事をお知らせしなさい、と。

向こうとて育てた子供が可愛くないはずはないでしょう。
それでも、それでも、横島さんの心を思っての言葉だったと思います。

その気持ちを汲んでください。

それを聞いて、横島さんの義母様は泣き崩れました。
「忠夫は、忠夫は、いい人に育てられたんだねぇ」
「ああ、すばらしい人格者だな」

しんみりとした雰囲気の中で、空気を読まない幼児が一人。
「で、何人女がついてくるんでちゅか？」
「「「「「「ぶっ！」」」」」」

おもわず視線がパピリオに集中します。

「な、な、なにをいってるのよ！」

「美神もあまいでちゅ。あのタダオが、長期間放置されて、新しい女を連れてこないわけがないでちゅ。これは常識でちゅよ？」

ほんわかした雰囲気は、まるで鉄火場のような空気になってしまいました。

くぅ、バカパピ！！　空気読みなさい！！

「で、何人？」

これはいわざる得ないでしょう。

「受肉した英霊2体、義理の姉1名、クラスメイト1名、本家のメイド2名です」

「・・・小竜姫さま、その受肉した英霊って？」

「詳しい話は再会したときに聞くといいでしょう」

私はそれで話を切ったつもりだったけど、いくつもの手が私をとらえた。

「「「「「そこんところ、くわしく！」」」」」

わーーーーん、私だって聞きたい方の立場なんですってばぁ！

神魔ともに評判を落とした事件から一週間ほどで忠夫の行方が解ったと連絡が入った。
何でも、異世界に飛ばされていたそうだ。

あの事件以降、なんというか、そういう事件に関わることが多くなった息子をどう評価していいか解らない。
妻は「生きていればそれでいい。どこででも生きられるように教育した」と言っていたが、妙神山での説明会の際には泣き崩れた。
子を思わぬ母は無し、とはよく言ったものだ。

ともあれ、帰ってくる息子だったが、いろいろと問題もあった。
まず、幼児になってしまった息子を育ててくれた養父母がいること、向こうで十年以上世話になっていること、そして、向こうでそれなりに柵を作っていることだった。
まぁ、あの息子が帰ってくることを念頭に置いて誰とも柵を作らない生活などできるはずもない。
逆に、そんな生活をしていたというのならば殴り飛ばさなくちゃならなかった。

「百合子」
「・・・解ってるわ。男の子ですもの。いつかどこかに行っちゃうって解ってる」

少し涙ぐみなぐ見ながら、百合子と私は、その時を待った。

第十一話（後書き）

このへん、時間の差が大きな問題になります。
そう、魔術師とかＧＳとか、そういうことじゃなくて。

第十二話（前書き）

ＧＳ世界にやってきましたー！

第十二話

荘厳な光の壁を抜けて、人影が現れました。
それは、とても懐かしい気配の人でした。

「よ、っと。おお、懐かしいな！」

笑顔でそう言った彼に、一人の女性が抱きつきました。

「・・・忠夫！！」
「お袋」

ゆっくりと、優しく抱きしめる彼、横島さんは、少しだけ泣いていました。

「よく無事だったな、バカ息子」
「ああ、いろんな人に世話になったけど、帰って来れたよ、親父」

かるくパンチを決めた横島さんのお父さん。
それを手のひらで受けた横島さん。
そんなやりとりの中、少しだけ時間をおいて現れた男女。
ちょっと髭がよれっとしているけど、なんだか緊張感を感じる男性と、まるで女神のような銀髪紅眼の美女。

「紹介するよ、お袋、親父。こちらが向こうで世話になった養父母、キリツグ＝衛宮＝フォン＝アインツベルンさんとアイリスフィール＝衛宮＝フォン＝アインツベルンさん。御夫婦だ。・・・で、こっ

ちが、横島百合子、横島大樹、生みの母と実の父」

すっと離れた百合子さんは、ちょちょっと身支度を整えて、深々と頭を下げた。

「今日この日まで、忠夫を育てていただいたことを心から感謝いたします」

「いいえ、忠夫君には私たちも育てていただいたようなものですわ。子は親を映す鏡ともうします。忠夫君を見れば、どれだけ素晴らしいご両親か解りますわ」

「いえいえ、こちらでは厳しくするばかりで、一度は我が子を歪めてしまいました。それを正してくださったのは、いわば忠夫の仲間。両親の教育などとおこがましい話で・・・」

「そんな忠夫君をお育てになったご両親こそ胸を張るべきですわ」

なんだか無限に続くような話の横で、キリツグさんと呼ばれた男性と大樹さんが、なにか通じあうものを感じているようで、握手してます。

そんなご両親の後ろから、今度は何人かの女性が現れました。

「うわ、霊気濃いわね」「はぁ、スゴい気配」

一人は黒髪を両脇に留めた「赤い」人。

一人は先ほどの女性を幼くした感じの少女。

「ようこそ、俺の元居た世界へ」

「禁忌と秘匿のない、オカルトの天地、か」

するっと、何故か私が彼女たちのところへ連れてこられました。

「彼女が氷室絹、おキヌちゃん。美神令子除霊事務所の同僚だよ」
「は、は、はじめまして、氷室絹です！」
反射的に挨拶すると、二人はにっこりと微笑みました。
すごく優雅です！！
「初めまして。忠夫君のクラスメイトの遠坂凛です。向こうでは魔術の相棒、そう思っていただいてかまいませんわ」
「・・・初めまして、イリヤスフィール＝衛宮＝フォン＝アインツベルン、イリヤとお呼びください。貴女のことは、おキヌちゃんでいいかしら？」
「は、はい！」
お話して解ったのは、イリヤさんは年上で、横島さんのお姉さんだそうです。
逆に、お二人にこちらでの横島さんの話を色々させてもらいました。
お二人とも興味津々で、遠坂さんは美神さんみたいな感じです。
とっても礼儀正しいけど、素直になれない、そんなかんじでした。
親父やお袋だけじゃなく、美神さんやおキヌちゃん、神父やピート、雪之丞や冥子ちゃん、シロ・タマモ・みぃさん、ケイ、愛子、

エミさん、魔鈴さん、みんな来てくれた。

「あー、僕も居るんだがね」
「ロン毛は無視や」
「・・・変わらんね」
「変わりようがねぇし」

ロン毛公務員は相変わらずで、思わず拳を交差した。

「・・・驚いた、霊力のまとまりが数段高くなってるじゃないか」
「ま、修行してたしな」

雪之丞も勝負だ！　と笑顔。
お、タイガー、元気か？

そんな会話をしているところで、背後の気配が増えた。
大荷物を持ったリズと恋、そしてねねとセラだろう。

「老師、向こうのゲーム一式を持ち込みましたんで、楽しんでください」
「・・・でかした、愛弟子よ！」

小躍りの猿神老師をみて、なにやら興味津々の恋。

「ご主人様、あの猿、強い？」
「せやな。わいが百人居ても勝てないやろな」

きらきらした瞳で、まるで山盛りのご飯をみるような瞳の恋。
自分を遥かに越える武を感じて、ずいぶんと興奮しているんだろう。

「・・・あー、よこしまくん、その、ご主人様というのは・・・・」
「ん？　ああ、向こうの呪術儀式のなかで召喚した英霊だ。主従契約してるんで、『ご主人様』なんだそうだ」
「あの、小さい子もかい？」
「あれでも天才軍師だぜ？」

彼女らの名を告げると、さすがに目をむく西条だった。

「なんてデタラメだ」

呆然とする西条や雪之丞たちをさておき、俺は彼女へ一歩進み出た。

「ただいま、パピ」
「・・・ヨコチマァーーーーー！！」

全力の包容に耐えるだけの力を得たことを実感しつつ、なでつけると、その隣にワルキューレが現れた。

「戦士の顔になって戻ってきたな」
「ああ、色々あったからな。こんな顔にならざるえんかった」
「なに、男ぶりを上げて帰ってきたんだ、誰も文句は言わん」

拳をこつんと触れあう。
それだけで色々なものが通いあった気がした。

「ふふふ、ヒト目で修行の成果が解るほど腕を上げているのです、一度剣をあわせませんとね？」
「小竜姫様、是非ともお願いします」

「超加速はありですか？」
「なしっすよ」
あ、そうそう。
「うちの恋が、老師に稽古付けてもらいたそうなんで、一度時間とってもらえませんかね？」
「・・・えーっと、あの方ですか？」
「そうそう、あの、今にも老師にかぶりつきそうな褐色美少女っす」
「・・・あの方、純粋な人間じゃありませんね？」
「ええ。いわゆる伝説となった人間、英霊っす」
「よろしいでしょう、時間をとりますね」
ニコヤカな小竜姫様とともに、もう一人の、あわなくちゃいけなかった人に視線を向けた。
「ただいま、美神さん」
「・・・お帰りなさい、横島君」

第十二話（後書き）

というわけで、帰郷第一回でした。

つうか、もうちょっと続く予定ですが、今回の更新はここまで

第十三話

こっちの女性は、忠夫の関係者は信じられないほど美形ばかりだった。
ご両親もかなりなものだったし、同僚の少女も桜の黒さを無くした感じの天然だった。
加えて人外の女性たちは、信じられないほどの美形ばかりで、恐ろしいものを感じた。
龍神、魔女、妖怪、魔族・・・。
だめだわ、自分の常識が揺らぐわ。

が、一番、そう、一番驚いたのは「美神さん」だった。

人間でありながら英霊を思わせる気配と力を感じる女性。
加えて美形、巨乳、ってどんだけチートよ！
さらに忠夫といい雰囲気じゃない！！

・・・やっぱりついてきて正解ね。

「（リン、強敵よ）」
「（そうね、イリヤ）」

表面的には氷室さんと色々とはなしていたけど・・・

「・・・みなさんのおかげでしょうか、横島さん、すごく落ち着いた感じで・・・」

「「！！」」

これは最優先収集情報っぽいわね。

私とイリヤは視線を一度交わした後で、そのへんを深く探り始めるのだった。

ご主人様にお願いしたら、あの猿と戦えることになった。

ところで、だれ？

「斉天大聖孫悟空、わいの師匠や」

「・・・ご主人様、すごい」

ご主人様の師匠が、あの斉天大聖だときいて、心底驚いたけど、ご主人様の師匠も驚いて居るみたい。

「こりゃ驚いた。あの悪鬼が、世界を変えるだけでこんなかわいい女の子になるとはのぉ」

どうやらご主人様の世界では、恋、呂布も、ねね陳宮も、愛紗関羽も男だという。

おかしな世界。

でもいい、私はご主人様に会えたし、ご主人様も私に会えた。

この世界、ご主人様を生んでくれた世界、恋は大好きだ。

「来い、呂布よ。三国一の武を示すがいい」
「・・・いく」

想像以上に強く、楽しかった。
また来ようね、ご主人様。

横島が無事に帰ってきた事の報告の後、俺も横島と手合わせしたが、想像以上に腕を上げていやがった。
小竜姫も感嘆の息を上げ、誰もが驚いた。
そう、そつなくバランスよく、それでいて想像を超えた位置にいた。

「まぁ、忠夫はおもしろい奴じゃからな」

不意に現れたのは老人。
というか、気配で言えば猿並だった。

「・・・あんたは？」

「わしは、向こうの世界の忠夫のダチじゃな」

・・・恐ろしいダチも居たもんだ。

「で、おぬし、おもしろ術を持っておるのぉ？」

「魔装術のことか？」

うんうんとうなずく爺さんと話しているうちに、色々な可能性に気づいた。

なるほど、横島め、こうやって引き出しを増やしやがったな？

「じいさん、感謝するぜ。おれもまだまだ強くなれそうだぜ！！」

「うむ、この世界はおもしろいのぉ、お主のような原石がごろごろしておる」

「なんなら遊びに来てくれよ、横島込みでよ！」

「・・・忠夫がこちらに残るという選択しもあると思うが？」

「たぶんアイツは向こうに行く」

「なぜじゃ？」

「・・・これでもあいつとは親友ってやつでな。あいつがなにを想って向こうを選ぶかぐらいは解るつもりだぜ」

あいつは優しい。

そして自分のせいで誰かが傷つくぐらいなら、この世界を捨てるだろう。

「なんなら、お主もくるか？」

「遊びにならいいけどな。俺にも守りたい相手が居るんだよ、こっちにな」

「ふむ、やはりおもしろいのぉ、お主等は」

横島が連れてきたメイドとタイガーが手合わせしているが、さすがにハルバートを軽々振り回せる相手じゃ勝ち目ねえぞ、タイガー。

「ふむ、おもしろい。こちらの術を研究して、回廊でも造るかのぉ？」

「そりゃうれしいな。武者修行の先が増えるぜ」

「ふぉふぉふぉ、そりゃ頼もしいのぉ」

さすが横島だ。

アイツが関わると、物事が異常に大きくなりやがる。

「ところで、おぬし、あれはどうにかならんか？」

「むりだ」

横島を中心に、女たちの鞘当てが始まった。

向こう対こっち、まぁ勝負にならんが、いいコミュニケーションだろ？

第十四話（前書き）

妙神山の続きです～

第十四話

横島さんが行方不明になって、仕事もそこそこに捜索していた僕たちでした。
そんな中、横島さん発見の報を受け集まってみれば、なんと異世界に飛んでいたという。

さすが横島さん。常識の斜め上に行く存在です。

そして異世界から帰ってくると言う話を聞いて妙神山に出迎えに行ったのですが、あの人らしいと言うか何というか、何人も女の人を連れて帰ってきました。

そのせいで空気が悪いのなんのって。

対面も挨拶も手合わせも終えたいま、帰還記念&歓迎宴会が開催されているんですが、様々な攻防が目の前で繰り広げられていたりします。

まず、膝の上攻防。
パピリオさんと陳宮さんが左右に座り、独占を目指して攻防しています。
で、座席の左右は美神さんと遠坂さんが分けあっていますが、その隙をついて小竜姫様やらミィさんがお酌をしたり料理の取り分けに入ってきたりと大攻防。
おキヌさんはさすがに入りきれないらしく、対面席を維持することで別途の流れを作ろうと必死です。
そう言う意味では対面にいるケイ君と共に和やかな空気を作り出

そうという流れはさすがだと思います。

そんな中、別の意味で人を集めているのは呂布さんでしょう。
あの衝動物を思わせる風情には向こうの人々もこちらの人間もメロメロです。
横島さんのお母さんも、「あんた、あなた、この娘、うちにつれてかえりましょう、ね、ね？」 と抱きしめながらご飯を食べさせていたりします。
呂布さんも横島さんと同じ空気を感じてか、お母さん、百合子さんに懐いているようです。

「ご主人様のお母さん？」
「そうよ、呂布ちゃん」
「・・・恋でいい」

真名の意味を聞いていたので、その重みと真意を感じた百合子さんは、とても嬉しそうだった。

「私のことも百合子でいいわよ？」
「・・・お母さんって呼んでいい？」

その言葉に感動した百合子さんは、半泣きで大喜び。

「忠夫、忠夫！　恋ちゃんは妹、妹よ！！」
「おう、ねねも恋もわいの妹やな！」
「パピもでちゅ！！」
「おう、パピもな！」

そんな空気に当てられて、鉄火場のような空気が和らぎました。
さすが超級フラグ構築師特級。

恐ろしい手並みです。

「いや、さすがですね、大樹さん」
「いえいえ、キリツグさんもなかなか」

会場の端で父親コンビがグラスを傾けています。
こっそり話を聞いてみると、どうやら女性遍歴の話らしく、現在進行形のようです。
近くに奥さんがいる状況でよくもまぁ・・・

「・・・キリツグ、増やすのはだめだって言ったわよね？」
「・・・アイリ・・・」

雨天のない妙神山に血の雨が降りました。

聞けば聞くほどに興味深い話でした。
人の生活に役立つ白魔法を目指す私にとって、向こうの世界の魔術は相入れない存在かと思いきや、実に多くの接点を持つものでした。
そう、根元を目指すという姿勢には、何者をも切り捨てて目指すというストイックさは、間違いなく同じ姿勢を感じましたから。
逆に現世利益という生き方でみると、真逆にあるんですよね、魔術師って。
世代を越えて、血脈を重ねて、ひたすらに、ただひたすらに魔法を目指すという姿勢は、その先が何かを別にして、感銘を受ける生

き方に感じました。
まるで、一族という大きな生き物が、魔法という巨大なカリキュラムに挑むかのようで。
その大きなうねりのような力の流れを、私は少しだけうらやましく思いました。
そう、彼らの感覚で言えば、私は一代目の魔術師。
刻印も纏めていない研鑽中の魔術師と言ったところだろうか？

「あー、魔鈴さんでしたか？」
「はい、魔鈴めぐみです、遠坂さん」
「・・・はっきり言いますとね、空飛ぶ箒なんてものを実用化している時点で、すでに封印指定を受けますよ、魔鈴さん」
「・・・え？」

え、っと、普通に飛べますよね、人間って。
あれー？　もしかして私って、そっちだと非常識ですか？

「いわゆる『越人』扱いです」

・・・あれー、おかしいなぁ。
私ってば、過去に存在した白魔法の復活を目指しているだけなのに。
そういい、いわばオカルトの考古学ですよ？

「基本、途絶えた系譜を復活させると言うだけで禁忌を越えてますし、それを魔法レベル一歩手前まで実用している時点で封印指定ですね」

うわー、ルール厳しいんですね？

「そういう問題じゃないと思いますけど・・・・、でも忠夫が非常識な理由の一端をみた気がします」

いやですねぇ、横島さんの非常識と私たちの常識的行動を一緒にしないでください。

「あー、やっぱり、忠夫って、こっちの世界でも非常識なの？」

そりゃそうです。

オカルト世界に入って、わずか一年足らずで魔神を迎え打つ超越者になるなんて、あり得ませんもの。

そういう意味では、横島さんや美神さんは時代が準備した英雄なのかもしれませんね。

「・・・そうなると、少し話は物騒ですね」

「・・・はい」

魔神をも殺す英雄。

それほどの存在を、世界が許容するか、そういうこと。

少なくとも、異世界にとばされた横島さんの話を聞いたとき、「やっぱり」と思わされた。

そう、この「世界」での役目を終えた英雄の処理としては、他の英雄たちに比べて至極穏便な形といえる、と。

実際、横島さんに比べて霊的な上昇期を終えている美神さんは、時間経過で自分の力の低下を感じているという。

それは世界による減力なのか、肉体的な衰えなのかはわからない。

でも、その流れは理解できる。

そう、この世界での英雄とはそういうものなのだ。

「・・・魔鈴さん、少なくとも、うちの世界は歓迎しますよ」
「ありがとうございます」

私自身も新発見された白魔法の成功率低下を意識していた。
そう、今までの全ての成功が反転しているかのように感じるほどに。

第十四話（後書き）

てなわけで、地味な動機付けでした。

つうか、魔神たおしてそのまま放置って、やっぱり難しいですよね～

で、その意味付けをしてみました。

まぁ、この「世界」の意味付けですが。

第十五話

聖者とは、神聖にして犯さざるもの。
基本、だれか、神に認められた存在だ。
その神の権力が盤石である限り、揺るぎ無い力だろう。

勇者とは、時代が求めた新たなる神のような存在だ。
これは閉息された世界を打ち破る、いわば神の先兵。いや、人の集合意識が望んだ光の意志ともいえる。

そして、英雄とは。
人の世界が気づかぬウチに壊されそうになったときに現れる防御反応。
人の「世界」が望む最高の防御成功への「テンプレート」。
そこを目指していくつもの人が走り、その終着点に至ることがまれながら、確実に世界のバックアップを受けることになる存在。
成功の因果反転に至るために、あらゆる犠牲を強いられる存在。
結果に至るまでの生活・仲間・家族・仕事すべてが世界の犠牲となる。
そして、結果によって得られたゆがみがその英雄の存在自体に襲いかかるとき、世界はなにもしない。
そう、使い終わった道具には用がないからだ。
だから、忠夫の転移は、一種救いだったのだろうと私は考える。
これで、世が世ならば、ワシのように神格を押しつけられて無理矢理神の僕にさせられているだろう。

再会から一晩が経ち、ワシとの対話を終えた忠夫は、苦笑いで向

こうの世界に居を移すことを宣言した。
忠夫のご両親は「そうか」と理解を示したが、美神令子たちはかなり不満を感じているようだった。
「あ、あの、私もそちらに行ってもいいでしょうか？」
おずおずと手を挙げたのは魔鈴めぐみ。
「え、魔鈴さん、なんで？」
忠夫の問いに笑顔の彼女はいう。
白魔法研究のため、と。
英雄の一人であった彼女にとって、その言葉は今や足かせでしかない。
研究者としての彼女にとって、この世界に留まるぐらいなら、研究がしやすく、世界からの逆バックアップのない世界に行きたいぐらいなのだ。
これが表向きの理由だということは、美神令子以下、多くの女性に分かりやすい話であった。
「じゃ、私も行きたいかな？」と言葉を漏らしたのは狐の嬢ちゃん。
このままこの世界にいたら、狩られちゃいそうだし、と笑顔。
確かに、政府関係者がオカルト関連での実績として、いつか刈り取る算段をしていると聞いたことがあるのぉ。
「あ、あの、本気、ですか？」
元幽霊の嬢ちゃんが、不安そうにいう。
自分も行きたいが、美神の嬢ちゃんや養父母をおいていけん、そ

ういう話じゃろ。
その感覚は人として正しいがな、そんなものを擲って進む勢いも必要じゃぞ？
「氷室さん、私は、横島さんが世界を渡ったと聞いた瞬間からこのことを考えていたんです」
「おキヌちゃん。やっぱりこの世界は人間より過ぎなのよ」
その気持ちは、怪異の親子にも伝わっていた。
「横島さん、私たち親子も同行できませんか？」
「にいちゃん・・・」
すぅっと深呼吸して、周囲を見回す。
「向こうも向こうで残酷やし、後悔するで？」
「でも、ヨコシマがいるじゃない」
間髪入れず言った、そんな狐の嬢ちゃんの台詞が全てじゃろう。
忠夫も観念しおった。
「一応、後悔したら帰れるように、ゲートは定期的につなぐから」
なんでも、向こうの世界の師匠とともに、ゲートをつなぐ事ができるようになったという。
本当に企画外じゃな、おぬし。
「つまり、定期的にそちらに行って、新作ソフトを買いに行けるという事じゃな？」
「そんな理由で、目をキラキラさせんなや！」

ずいぶんと消極的な理由で、忠夫が帰ってくることが決まった。
こちらに来ることになった魔鈴めぐみさんとの話の内容が本当なら、忠夫もこちらにいるほか無いだろう。
とはいえ、白魔術、いや、精度や効力を見れば、すでに魔術の領域を越えていることは確実。
でも、魔法に至っていない。
なんという封印指定。
忠夫が何度も思い直すことを勧めたことがわかるというかなんというか。
が、あの、魔力を食べるだけで回復させる料理には恐れ入った。

心底感謝。

セイバー、アルトリアも泣きながら食べてたし、士郎も感動していた。
士郎の料理を至高の存在としていたアルトリアの意識を砕くものになったほどだった。
そういえば・・・

「桜、落としたの？」
「ばっちりです、姉さん」

憑き物が落ちたかのような様子に、逆に不安を感じた私だった。

タダオがこちらの世界を選んでくれたのは純粋にうれしかったけど、もっと素直に「お姉ちゃんが大好きだから」って言ってくれても良かったのに。
というか、もっとハッキリ言うべきだったんじゃないかしら？

「イリヤ姉さん、戻ってきたら一成がすぐに電話がほしいって」
「もう、甘えんぼね、一成って」
「いやいや、未処理で逃げ出した仕事の件で、きっちり話を付けるって言ってたぞ？」

あ、あれー？　全部押しつけたはずなのに。
まぁいいわ、あいつ優秀だから、文句言ってきたら禅譲だっていえばいいし。
ふふーん、お姉ちゃんは無敵なんだからね？

「あんなぁ、イリヤ姉。ちょっと痛い目あった方がええで？」

なによ、タダオ。
愛しいお姉さまが苦しむところが見たいの？　そうなの？　そういう趣味なの？　だったら少しだけ見せてあげてもいいわよ？　タダオがお姉ちゃん教に入るなら、ね？

「まだそんな邪教ネタ引きずってるんかぁ？」

もう、シロウですら枢機卿なのに。

「あ、イリヤさん。先輩はその宗教を脱しました」
「そうです、イリヤスフィール。シロウはイリヤスフィールのもの

ではありません」

・・・え？

どういうこと、シロウ？

「・・・あー、その、なんだ・・・」

シロウ、おねえちゃんと話をしましょう。

「その、すまん！　イリヤ姉・・・」

ＯＨＡＮＡＳＨＩ、の時間だよ、シロウ。

「い、いだだだだだ！　イリヤ姉、腕はそっちに曲がらない！！」

ダイジョウブだよ、シロウ。

シロウの体は、剣でできているんだから・・・・

ねっして・たたいて・うちなおせば、わたしのだいすきなシロウにもどるよ。

「むり、むりだから、いたいから！！」

ふふふふふふふふ。

まぁ、なんつうか、押しの弱いシロちゃん、成仏しろよ？

思わず拝んだ上で、タマモと魔鈴さんを屋敷の空き部屋に案内した。

シロちゃんは何人か俺が連れ帰ることを予想していたらしく、大部屋に一晩泊めて、後の部屋は翌日以降に準備するつもりだったらしい。

「じゃ、横島さん、いろいろとお話聞かせてくださいね」

「ヨコシマ、これからよろしくね」

にっこりほほえむお姉さま系美人と経国系美少女。

やっべー、眠っていた煩悩が溢れるぜ。

「あー、一応、こっちの世界じゃ『衛宮』だから、名前で呼んでくれない？」

ちょっと戸惑うふたりだったけど、にっこり微笑んでくれた。

「じゃ、よろしくお願いしますね、忠夫さん」「よろしく、タダオ」

うん、美人さん増加で俺の人生も・・・

「うわーーーーん、タダオーーーーー！！　おねえちゃん、おねえちゃん、シロウに裏切られたぁーーーーー！！」

いきなり大上段からのおねえちゃんダイブをカマス、我が義姉、イリアスフィール。

その裏切りに一枚かんでいるだけに、内心申し訳ない思いがしな

いでもない。

つうか、この状況、まずくね？

「あんな、イリヤ姉。俺もシロちゃんも、なにがあってもイリヤ姉の弟なんやで？」

「でもでも、シロウってば、シロウってば、お姉ちゃんより桜とかアルトリアを選ぶってぇ・・・・」

うわぁ、そこまで言ったか、シロちゃん。

ちょっと男前やな。

「それでもな、イリヤ姉。それでも家族の絆は切れん。どんなに人が間に入っても、どんなに世界を隔てても、家族の絆は切れん。それはイリヤ姉もしっとるやろ？」

涙で塗れた顔を、俺に押しつけて、小さくうなずくイリヤ姉。

まぁ、なんつうか、時間が解決してくれるやろ？

「・・・ねぇ、タダオ。タダオもお姉ちゃんの弟なのよね？」

「そうやで、イリヤ姉」

「・・・タダオも裏切る？」

「え？」

「・・・ナイスバディーにだまされて、お姉ちゃんを裏切るのかしら？」

「えええええ！？」

がっちりと喰らいついた両腕が離れない。

「さぁ、じっくりとお話しましょう、タダオ？」

「ま、ま、まてくれ、魔鈴さんとタマモにこの世界の話をやな・・・」
「タダオも、オネエチャンヨリ、オンナヲトルノ・・・？」
やば、壊れる寸前や。
「あ、あの、よろしければ、今までの忠夫さんの話を聞かせてもらえませんか？　主に姉弟の愛の話を中心に」
「エ？」
「こっちの常識も知りたいから、お願いできる？」
ナイス、ナイスすぎるぜ、魔鈴さん、タマモ！！
「・・・ウ、ウン、わかった・・・」
どうにか機嫌を直したイリヤ姉のお姉ちゃん節は、正直胃凭れしました。
でも、まぁ、男を見せたシロちゃんへの援護攻撃や、ちょっとぐらいがんばるって。
ということで、今晩も頑張れ、シロちゃん。
俺も、「お姉ちゃんの座椅子」としての運命を受け入れるからな。

第十五話（後書き）

かえってきました！

そして、当然のように喰われてました＞シロちゃん。

ナームーw

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8935x/

GS　Ｆａｔｅっぽい何か

2011年12月18日10時03分発行